

疎開学童の生活

寝静まった枕元で、教員や寮母が、子どもたちの繕い物をしています。(右)
『アサヒグラフ』
第43巻第5号(昭和19年8月)



畳敷きの涼しい教室で、みんな仲良く勉強しています。(左) (同上)

戦時下の小学生3 ～東京都戸山国民学校土浦学寮～

アジア太平洋戦争の末期、アメリカ軍の本格的な本土空襲に備えて、東京・大阪・名古屋・横浜など大都市の国民学校初等科の児童を地方都市や農村に個人的に(縁故疎開)或いは集団的に(集団疎開)移住させることになりました。土浦にも1944(昭和19)年9月、戸山国民学校(現東京都新宿区立戸山小学校)の3・4年生が疎開して来ました。

学童疎開

学童疎開は、文部科学省の『学制百年史』によれば、次のような経緯で実施されました。

1943年末からは、アメリカ軍の本土空襲に備えて、学童を戦禍から守るため、国民学校初等科の児童の「縁故疎開」に便宜を図る措置が、採られるようになりました。更に、1944年6月にアメリカ軍がサイパン島に上陸すると、同月末、政府は、「一般疎開ノ促進ヲ図ルノ外特ニ国民学校初等科児童ノ疎開ヲ強度ニ促進スル」ことを閣議決定しました。

この決定では、学童疎開は、縁故先への疎開を先ず勧奨し、縁故先の無い者に対しては、「集団疎開」の方法を採ることになり、同時に、疎開の具体的方法として、「帝都学童集団疎開実施要領」が決定されました。対象となったのは、国民学校初等科3年生から6年生までの児童で、保護者の申請によって、疎開させることとしました。学童疎開を行なう都市として、7月の文部省通牒で、東京都区部・横浜・川崎・横須賀・大阪・神戸・尼ヶ崎・名古屋・門司・小倉・戸畑・若松・八幡の13都市を指定し、受け入れ先としては、それぞれの近接県が選ばれました。更に、翌1945年3月、政府は、「学童集団疎開強化要綱」を閣議決定し、低学年児童にも、父兄の希望により参加を許し、4月には、京都・舞鶴・広島・呉の各都市が追加され、1945年の疎開児童は、45万人に及んでいます。

したが、1944年9月に、文部省は指令を改め、旅館を宿舍とする場合には1ヶ月の食費を25円と、その他の場合のそれを23円以内とし、特別の事情のある場合には、文部大臣の承認を受けることとしました。保護者は、生活費の一部として、月10円を負担しました。児童は、食糧や薪炭の調達に追われることが、教職員も、生活物資を集めるために奔走することが、多くなりました。

疎開先での教育施設として、国民学校や中等学校などの教室或いは公会堂・寺院・寮舎・農舎などが利用され、それらは、疎開する側の学校の分教場として取り扱われました。疎開児童の教育には、主として疎開側の教職員が当たり、疎開側と受け入れ側の両方の教職員が、相互に相手校を兼務する形で、両校の児童に接していました。児童数は1宿舍100人を単位とし、2学級に編制し、訓導2人、寮母5人(内1人は看護婦)、作業員3人、寮務嘱託員3人、嘱託医1人が配置されました。疎開児童の保健衛生については、文部省は、1944年8月に、「疎開学童ノ保健衛生ニ関スル件」を指令し、受け入れ側の婦人団体・医師会・歯科医師会などが協力して対応しました。

集団疎開に要する経費は、保護者の負担分を除いた、疎開側自治体の負担額に対しては8割を、受入諸費に対しては全額を国庫が負担しました。1944年度の国庫補助予算は、1億100万円、1945年度のそれは1億4000万円でした。

1945年1月には、政府は、集団疎開の継続を閣議決定していました。が、同年8月、疎開児童たちは、それぞれの疎開先で終戦の日を迎えました。

土浦館と戸山国民学校児童

1944年8月、大都市から地方都市や山村への学童の集団疎開が始まり、茨城県内にも東京の学童が多数疎開して来ました。土浦には1944年9月、戸山国民学校の3・4年生270人が、教員7人(男2・女5)、寮母11人、炊事婦9人とともに疎開して来ました。疎開先は、川口川沿いにあった旅館土浦館です。

当時、川口川には、土浦城(現亀城公園)の裏門の土橋からはじまって、搦手橋・桜橋・祇園橋・匂橋・朝日橋・八千代橋・柳橋・開門橋と9つの橋があり、朝日橋から開門橋までは、霞ヶ浦通運の蒸気船が航行できるように、橋桁が高く組まれていました。特に八千代橋は、又の名を太鼓橋と言ひ、水面より4.5mの高さに見事な円形を画いていて、夏には、子どもたちが、高い欄干の上から川面を目掛けてダイビングを楽しんでいました。これらの橋は、川端の柳とともに川口川の風物となっていて、本校旧職員の永山正は、1925(大正14)年4月に着任した際に、「水と柳と橋との、絵のような風景を初めて見て、水の都土浦を実感した。」と述べています。その八千代橋の袂にあった土浦館は、以前は、「三味線屋」という名の船宿でしたが、1895(明治28)年に、木造3階建に建て替えられ、名前も「旅館土浦館」と改められました。「三味線屋」時代から長塚節などの文人墨客が多数訪れていて、土浦の名旅館の1つでした。

土浦館では役所の依頼を受け、館主の染谷恒(つね)さんは、辛い思いをしている子どもたちのために、と旅館業を廃業し、長年尽くしてくれた従業員にも泣く

泣く辞めてもらい、旅館を「東京都戸山国民学校土浦学寮」としました。染谷さんは、「東京の子は勉強をするから。」と資材不足の中、当時、国民学校5年生であった娘の愛子さんの体格を参考に、机などを作り、受け入れ準備に当たりました。

「東京都戸山国民学校土浦学寮」となった
旅館土浦館（左）
（土浦市立博物館第40回特別展図録
『町の記憶—空都土浦とその時代』）



戸山の子どものための
学寮前での戸山国民学校児童
（右）（同上）



戸山の子どもたちは、最寄り駅で親と別れ、疎開先の土浦館に遣って来ました。初めのうちは遠足気分でしたが、2、3日後にはホームシックに罹り、夜になると、皆、布団の中で泣いていました。教室は、土浦国民学校（現土浦小学校）に間借りをしましたが、教室が足りないもので、2つの学年が、交替で1日置きに登校し、学校に行けない日には、学寮で勉強しました。「体操」は土浦城の本丸跡の広場で行いました。

当初、学寮の食事には、ワカサギや納豆などは十分にありましたが、食器類が足りなかったため、弁当箱の蓋におかずを、身にご飯を入れていました。しかし、次第に食糧事情が厳しくなり、おかずが少なくなると、さつまいもやジャガイモが主食の食事が多くなりました。そのため、面会に来た親が、お手玉の中に煎り大豆を入れて持って来てくれて、それを1粒ずつこっそりと食べていた子も居ました。中には、甘いので絵の具を食べた子も居ました。

空腹。おやつが無い日々。規則に縛られた生活。慣れない共同生活を送っている子どもたちの最大の楽しみは、親との面会でした。列車の切符が買えず、ごくたまの面会でしたが、子どもたちにとっては、何より嬉しいことでした。しかし、面会は、別れる時の新たな悲しみを生みます。旅館の前の川口川に架かる八千代橋を親が渡り切り、姿が見えなくなると子どもたちが一斉に泣き出すので、この橋は、「涙橋」とも呼ばれるようになります。親からの手紙も楽しみでしたが、子どもたちからは、全てが検閲を受けていましたので、親には子どもたちの本当の状況は伝わっていませんでした。

子どもたちのもう1つの楽しみは、予科練生や飛行予備学生、海軍航空隊の隊員たちが、慰問のため、時々遊びに来てくれることでした。彼らは、子どもたちにとっては、優しいお兄さんでした。休日には、お菓子などを持って、遊びに来てくれました。学寮にあったオルガンで伴奏をしてくれて、一緒に歌を歌ったりゲームをしたりして、楽しい時間を過ごしました。時には、休日に寛ぐために借り上げていた下宿に、何人かを呼んでく

れて、その頃には珍しかったパイナップルの缶詰を腰の短剣でクルクルと開けて、食べさせてくれることもありましたが、しかし、優しいお兄さんたちは、別れの言葉も無く、急に来なくなりましたが、その意味を知ったのは、終戦後のことでした。

1945年に入ると、空襲が激しくなり、警戒警報・空襲警報が鳴る毎に、子どもたちは、学寮の防空壕へ避難しました。夜中に警報が鳴ると、2・3階に寝ていた男子が、女子の寝ている1階に降りて来て、男子は西に、女子は東に枕を置き、互い違いに寝て、空襲に備えていました。

群馬県への再疎開

1945年3月10日には東京大空襲があり、4月13日の空襲で、戸山国民学校の校舎も全焼しました。5月になると、海軍航空隊に近い土浦は、空襲を受ける虞があることから、子どもたちは、群馬県に再疎開することになりました。焼け野原となった東京を子どもたちには見せないように、と土浦駅から友部駅へ、そこから水戸線で小山、小山から両毛線で高崎へ出て、上信電鉄で富岡へ、と乗り継いで行きました。疎開先は、北甘楽郡吉田村南蛇井（現富岡市南蛇井）の桃林寺という山寺です。山寺のため水が不足し、入浴の日には山門前からバケツリレーで水を運びました。更に、水不足による不衛生や栄養不足のために、蚤や虱が髪の毛やシャツに付き、子どもたちを苦しめました。寮母たちが、衣類を煮沸したり、女の子の髪を梳いてやったりして、何とか凌いでいました。

食事は、土浦よりも更に粗末なものになり、子どもたちは、勉強の合間に、一

品でも多く、とアサザやシロザなどの野草の葉を採って来ました。群馬県は養蚕の盛んな地で、子どもたちは、農家の手伝いに行き、桑の枝の皮剥ぎや雑草取りなどをしました。そして、その晩はお風呂に入れてもらい、晩ご飯をご馳走になりました。子どもたちは、これを「お呼ばれ」と呼んで楽しみにしていました。終戦の日には、教職員と児童全員とが、本堂の前に整列してラジオを聴きました。子どもたちも泣いていましたが、これで東京に帰れる、と分かると、次第に嬉しさに変わってきました。9月には、親がそれぞれの子を迎えに来て、1年に及ぶ学童疎開も、終わりを告げました。

※土浦市の学童疎開
土浦市にも次第に空襲の危機が迫ってきたので、市は1945年7月27日付で、学童の縁故疎開を勧奨している。そのため、染谷愛子さんは、上大津村現土浦市手野町に1ヶ月間疎開し、終戦の日を迎えた。

※参考文献（戸山国民学校児童関係）
「土浦発 未来への伝承133 戦時中の旅館土浦館」『土浦学寮』だっくす広報つちうら 2016年8月2日発行
「土浦館」東京から土浦へ学童疎開した子どもたちの記憶（土浦市立博物館閲覧コーナー）
（高21回 松井泰寿）

※土浦市立博物館第40回特別展

「町の記憶—空都土浦とその時代」
5月6日（月）まで開催されている。
霞ヶ浦航空隊と土浦航空隊。この2つの海軍航空隊と関わりを持った町の様相が紹介され、その歩みも辿られていて、本校所蔵の資料も展示されている。



昭和16年入学の1年桜組(担任小久保先生)

前列右から6人目が頼本富夫氏

戦時下の小学生4 ～朝鮮 興南龍城公立国民学校～

1910(明治43)年から1945(昭和20)年まで日本領であった朝鮮には日本人学校が設けられ、現地に進出した日本人の子供に対する教育が行われていました。今号では、朝鮮で生まれ、小学生時代を現地で過ごされた頼本富夫氏の著書『忘れ得ぬあの日 あの時～敗戦一北朝鮮・興南からの脱出～』から抜粋して、朝鮮での国民学校生活などを紹介します。

文中の【 】内は筆者による注記です。

父、頼本雅雄

私の父、頼本雅雄(1897(明治30)年～1962(昭和37)年)は、愛媛県伊予市の出身。大工の棟梁をしていた叔父小笠原秋吉の影響を強く受け、建築を学ぼうと志し上京。昼は株式会社松本組(現松本建設株式会社)で働き、夜は東京工科大学(現東京工業大学)建築科で学ぶことになった。学生として学ぶ身である父が最初に携わった仕事は、霞ヶ浦海軍航空隊にドイツから移送された「押収(欧州)格納庫」を組み立てる現場の監督であった。

1924(大正13)年3月に卒業すると、そのまま松本組に就職し、熊本第六師団偕行社(1931(昭和6)年の陸軍特別大演習の際には大本営となった。)改築工事、朝鮮総督府鉄道局図們線敷設工事、陸軍平壤兵器本廠建設工事に従事し、1934年から終戦までは、建築技師として、朝鮮窒素肥料興南工場の火薬工場をはじめ、多くの工場の建設を手掛けてきた。この朝鮮窒素火薬工場製造の固形燃料をロケット推進用に使ったのが、人間爆弾「桜花」である。一方、液体燃料は、国産初のジェット戦闘機「橘花」の燃料として使用されたが、これは、1945年8月7日の木更津海軍基地での初飛行に成功したものの敗戦となり、惜しくも使用されることはなかった。

重化学工業都市興南

【北朝鮮咸鏡南道】興南【現咸興市】は、20戸ばかりの草葺きの民家と小さな名ばかりの漁港とがあるだけの寒村にすぎなかったが、1927(昭和2)年から、日本の新興財閥である日室コンツェルン(注)が、鴨緑江の本・支流に世界有数の大発電所を建設し、その豊富な電力を背景に、硫安・油脂・火薬・電極・非鉄金属などの大化学工場群を建設した。更に、朝鮮窒素肥料など10社を超える日に、

本窒素肥料の子会社や関連会社が設立され、工場総面積は600万坪(1980万㎡)に及んだ。それらの設備の持つ能力は、水電解では世界第1位、硫安生産では50万tで世界第3位、とアメリカのTVAと比肩する世界屈指の大化学コンビナートが形成されたことにより、興南は朝鮮第一の重化学工業都市になっていった。更に、工場・倉庫・事務所は勿論、従業員の住宅から学校・病院・役場・集会所・警察署に至るまでの、完全な街づくりが行われ、従業員は4万5千人、その家族を含めた総人口は18万人に達している。当時の小学校の地理の教科書には、「東洋一を誇る化学肥料工場」と記載されている。

興南龍城公立国民学校

私は、1941(昭和16)年4月1日、興南龍城公立国民学校に入学した。ここは、1944(昭和19)年当時、朝鮮随一の設備の整った学校と言われ、朝鮮各地の教育関係者が視察に来ると言うことであった。このことは、当時の校長や担任からもよく聞かされた。この学校と隣接の興南高等女学校とは、急増する日本窒素肥料関係者の子弟のために特に設立されたものであり、日本窒素からの特別な手厚い配慮が随所に窺える。校舎は、鉄骨煉瓦造の2階建て、全館スチーム暖房であった。私は昭和16年12月、早朝で教室がまだ暖まっていなかった時、このラジエーターの上に凍えそうになった足を載せて、友達と「大東亜戦争緒戦の戦果を語り合っただけだ」と言う。暖房は、便所にまで設置されていたと思う。と言うのは、1階東の便所には、校内美化係で担任の森田敏枝先生が、青色のポスターカラーで苦労して書かれた「便所は心の鏡です」の文字が、スチームのために滲んでいて、気の毒な気がしたのを覚えていて、ある。ポスターカラーも入手困難になっ

ていたもので、家にある人は持つてきてほしい、と先生は言っておられた。学校の窓は全部二重窓で、これも防寒のためであった。2階中央の100畳ほどもあるうかという広い裁縫室も、気持ちの良い教室であった。

戦時中の食糧難時代、昭和19年秋の遠足では、弁当の検査があった。弁当箱の真ん中に梅干しを1個だけ入れ、おかずは一切入れないという、いわゆる日の丸弁当である。それ以外は一切禁止という厳しい遠足であった。母が、それではかわいそうだとアルマイトの小さなおかず入れに、その当時は貴重品であった缶詰の大豆の鯨肉を少々入れてくれたが、出発前の弁当検査で、担任の森田先生から「頼本さん、それはいけません!」と持参不許可となった。遠足終了後、弟吉伸と2人で裏山へ上り、持参を許されなかった弁当の残りを食べた。その時、遙か彼方に連浦飛行場が見えた。飛行場に飛行機は1機も見えなかった。海軍航空隊は全機が移動していたのである。

学校の朝礼では、皇国臣民の誓詞をその都度、朗誦させられた。これは昭和12年、皇国臣民としての自覚を促すべく、朝鮮総督府が制定したものである。内地では無用であった。元はと言えば、朝鮮人に日本人としての自覚を促したものである。児童用の「其の一」、大人用の「其の二」の2種類があった。早朝、駅のホームや工場などからは「一つ、われわれ臣民は!」という大人用の「其の二」を高らかに朗誦する声が、あちこちから聞こえてきた。

皇国臣民の誓詞(其の一)

一、私共ハ大日本帝國ノ臣民デアリマス

二、私共ハ心ヲ合セテ天皇陛下ニ忠義ヲ盡シマス

三、私共ハ忍苦鍛錬シテ立派ナ強イ國民トナリマス

龍城校講堂内部
(落成記念絵はがき。右壁面下部にスチーム暖房用のラジエーターが写っている。) 昭和20年3月の最後になった。



興南龍城公立国民学校
前のレールは新興鉄道
亜鉛工場引き込み線。右奥
は興南高等女学校(頼本雅
雄氏撮影 昭和11年)

勤労奉仕

頼本富夫『授業を割いて勤労奉仕』(龍城友の会第3号所収)1971(昭和46年)9月26日記

昭和20年度、私たち興南龍城公立国民学校の5年生男子は、4月から週に1度朝から窒素肥料工場へ勤労奉仕に出掛けた。学校の玄関には、「大東亜戦争完遂」のローガンが掲げられていた。学校の授業も、体操の時間は手旗信号の練習、音楽ではピアノの鍵盤の音に合わせてモータース信号を暗記した。運動場は開墾され、キャベツや馬鈴薯が植えられていた。鋏を取る日も多く、その上運動場の隅々には空襲に備えて待避壕(タコツボ)を造ったので、その穴掘りもしなければならなかった。学習と勤労奉仕が半々という状態で、その上に避難訓練もある。興南での昭和20年度は、落ち着いて勉強をしていなかったのである。

私たち男子は、天機里の窒素肥料工場へ(吠(藁筵を2つ折りにした袋)の縄通

しに度々出掛けた。目が痛くなるほどの強いアンモニアガスの中を潜り、薄暗い工場での仕事は何となく小学生の私には不安であった。直径4cm、長さ25cm

くらい先の尖った鉄のパイプを吠に突き刺し、そのパイプの中へ縄を通し、吠の口が閉じられるようにしておく作業である。尖ったパイプとは言え、袋状の吠へ一気に刺し通すというのは、なかなか体力の要る仕事である。あまり体の大きい方ではなかった私などは1日50枚の予定が、初日には半分くらいしかできなかった。手にできたマメに硫酸がしみ込んで、ヒリヒリ痛む。見かねた引率の塚原先生が、舟場君という体の大きなクラスでは腕白の名の高かった男子に手助けを命じ、やっとノルマが果たせたとやがて昼食になると、大豆粕入りのにぎり飯と糠蝦(アミ)の塩漬が出る。飯を家から持参するのは許可されなかったが、おかげで自由だった。私は持参した卵焼きを舟場君に進呈した。終戦も間近になった頃、この肥料工場行きは中止になったが、その時の報酬は、日の丸扇のマークが入ったチツソ石鹼1個だった。

松根油採集のための松根掘りも思い出の1つである。場所は忘れたが、これも天機里の奥の方だったと思う。重いスコップを肩に、板一枚の一本橋を渡って行った。途中あまりに喉が渴いたので、私は初めて川の水というものを飲んだ。仕事が終わってやがて帰途に就く。軍歌を歌いながら歩くのだが、へとへとに疲れて声も出ない。すると塚原先生から、「コラッ!歌えっ!」と一喝されて、スコップで頭を一撃された。(別に恨みがない。)

そこを歌っていると、道端に埋め込んであるコンクリート製の防火用水の中へザブンと落ち込んだ。精錬所の煙突のある

坂を下った、ちょうど九龍里の入口の所である。

学校前の亜鉛工場にもしばしば行った。薄ら寒い雨の降る中で、電線用の硝子(硝子)を水で洗った。これは女子も一緒にやったと思う。工場の小母さんが出してくれた熱い番茶が忘れられない。私の父は、ある建設会社【株式会社松本組】に勤務しており、当時は興南火薬工場のNZ製造工場の建設に当たっていた。NZというのは、特殊高性能爆薬である。建設途中で終戦となったため、NZは実現しなかったが、戦後、父はその建設の苦労話をよくしていた。

この火薬工場へ何日間か、火薬の袋貼りに行ったことがある。予め糊を塗った広げた一枚の大きな紙の上へ木型を置き、それを包むように左右を合わせて貼り、次に底を折り込んで貼るのであるが、何回もやるうちに相当熟練して能率が上がったと思っている。当時、日室興南工場に勤務しておられた鎌田正二氏(現チツソ石油化学取締役)の文章によると、軍は早くから興南地区からの撤退を予定しており、退却の時、火薬工場を爆破する計画であったと言う。危険な火薬工場での作業など戦時下であったからこそでき得たのだろう。

やがて終戦となり、工場破壊も実施されず終わったが、朝鮮戦争で完全に破壊された。昭和26年頃に見たニュース映画で、生まれた時から親しんだ、あの精錬所の大煙突が、米軍の手で木葉微塵に爆破されたのを知った時、言いようもなく残念で、淋しい気持ちになった。日本人の努力で完成した大工場である。これは単に私だけの感慨ではあるまい。

引き揚げ、帰国

1945年8月15日、敗戦の詔勅により、北朝鮮においては、日本人による行政機関は、閉鎖され、機能しなくなり、官吏

は逮捕か追放され、軍隊も警察も武装解除で捕虜となって無防備となり、都市は全く無秩序の混乱状態となった。日本人の財産は、公私を問わず没収され、生活基盤を1日にして失った。それまでの価値観は一変し、日本人としてのプライドは傷つけられ、物心両面から打ち拉がれた惨めな状態となった。更に旧満州・北朝鮮・シベリアなどのソ連占領地区からの引き揚げは、なかなか始まらなかった(北朝鮮では、日本人の第1回正式引き揚げは、昭和21年12月18日に始まった)。そこで、日本人は、いつになるやら分からない正式の引き揚げを待ち、切れず、ソ連軍の監視の目を掻い潜り、自費で帰国を図った。これが脱出である。私たち一家は、昭和21年4月22日深夜、密航船に乗り、38度線を越え、25日に注文津へ上陸した。注文津からは石炭運搬船で浦項を経て、30日夕刻、釜山に到着。5月1日夕刻、釜山出港。翌朝8時頃、博多港に上陸。4日16時、全員無事に、父の郷里・南伊予村上野(現愛媛県伊予市上野)に到着した。

※頼本富夫氏の著書『忘れ得ぬあの日』の時の敗戦―北朝鮮・興南からの脱出―には、朝鮮での生活、敗戦と引き揚げ、戦後間もない頃の松山での生活、と激動する時代の中での一家の記録が、詳細に綴られている。本校図書室にも同書を惠贈頂いた。

(注)日室コンツェルン

野口遵が、明治時代に日本窒素肥料を設立したことに始まる。「野口財閥」とも呼ばれる、日本窒素肥料を中心とする財閥である。15大財閥の1つ。アジア太平洋戦争の敗北により、総資産の90%近くを失い、戦後の財閥解体により解散した。日本窒素肥料はチツソと社名を変更し、その他の関連会社は、旭化成・積水化学工業・積水ハウス・信越化学工業などとなり、現在でも日本の化学工業の一翼を担っている。

(高21回 松井泰寿)



杉田氏が古仁廣先生と勤務された大麻里公学校
(昭和14年3月18日、第31回卒業記念)

台湾の小学校～敷島小学校(国民学校)・台東鎮文化国民学校～
つくば市臼井の故杉田市郎氏(元筑波町史編纂専門委員)は、40年の教員生活の中での1937(昭和12)年から1946(昭和21)年までは、台湾(1895(明治28)年から1945(昭和20)年まで日本領)で教鞭を執られ、大麻里公学校、太武小学校、敷島小学校、台東鎮文化国民学校に勤務されました。その台湾での教員生活の一端を綴られた『台湾の思い出』から抜粋させていただきました。
文中の【 】内は筆者による注記です。

古仁廣先生

日本領であった当時の台湾には、内地人の子弟が就学する小学校と現地人の子供達が就学する公学校とは、別々に存在していました。しかし、その地域の有力者の子弟が、内地人と同じく、小学校に就学した例も見られました。20歳代の10年間を台湾の教員として勤めましたが、今【平成10年】でも、担任した日本人・現地人双方の児童達や現地出身の友人との温かい交流が続いていて、台湾にも度々出掛けています。

1937(昭和12)年、最初に赴任した大麻里公学校でお世話になったのが、古仁廣(日本名吉村廣)先生。彼は私より6歳ほど年上でした。台湾の先住民族であったピューマ族の出身でしたが、台湾師範学校卒業の先輩教員であり、新採で勝手の分からない私にとっては、この上も無い指導者でした。彼とはその後、2年間、同じ官舎に住み、同じ釜の飯を食う、という共同生活を続けました。その間に、民族や生活習慣の違いを超え、お互いに尊敬し、信頼し合える心の繋がりが育まれ、終生の友としての交わりが深まりました。

敷島小学校(国民学校)

1939年4月から8月までの1学期間だけ太武小学校に勤務した後、9月に、台東にあった敷島小学校に転勤となりました。敷島小学校は、日本からの農業移民村に開かれた小さな学校でした(1941年3月、「台湾教育令」の改正により国民学校に改変される。)

満州や蒙古には、満蒙開拓団などと言って、日本人の農業移民村が次々に創られていったことは知っていましたが、台湾にも日本人の農業移民村が創られて

いたことを私は全く知らなかったもので、びっくりしました。満蒙開拓とは違い、日本の領土内に、日本政府の創った農業移民村でしたので、その入植条件は良いものでした。1戸当たり4町歩の耕地の無償配付と、生活の基盤となる住宅、水道設備、学校、診療所、医者、配置、マリヤ防疫所、通学路の設置なども、台湾総督府の手で準備されていたので、満蒙の農業移民に比較すると、数段恵まれたものでした。

私の勤務していた学校は、総戸数60数戸の村にあり、児童の数もそれほど多くはなく、1年生から高等科2年生まで合わせて、60〜70名だったと思います。それが1・2年生、3・4年生、5・6年生、高等科1・2年生と、4つの複式学級編成になっていたため、職員も学校長を含めて、4名でした。私は、この学校に1945年の6月まで、5年10ヶ月も勤務したので、この学校の教職員としては、最長の勤務者だったようです。ただし、この村には茨城県から入った家が1戸もなく、ちよつと寂しい気がしましたが、隣県千葉の人達が何戸も入植しておられたので、それらの家では、隣県出身の先生だとの近隣意識も手伝って、皆さん親しくしてくださいって、私が自炊生活をしているのを知ってか、「先生、今夜は私の家に飯食いに来いや。」などと、誘ってくださる家も出てきました。

学校長以外の職員は、3名とも独身でしたが、その中の川端先生が結婚されたのは、1940年の春でした。先生は和歌山県のご出身、奥さんも同郷の人でしたので、結婚式は郷里和歌山で挙げられました。先生が奥さんを連れて敷島に帰られたその日の夕方、奥さんは官舎に電灯の無いことに初めて気付かれたようでした。この頃の台東では、市街地以外には殆ど電灯の無い、石油ランプの生活でした。

官舎に電灯の無いことを奥さんに話せなかつたという先生のお気持ちは、私にもよく分かりました。学校官舎は1棟2戸建てだったので、私は隣の新婚さんの生活に気を遣いました。しかし自炊生活でしたので、ご馳走の差し入れは有難く、遠慮無く頂戴しました。気さくな奥さんは、「お手洗いをよく掃除すると良い子に恵まれるそうです。」と言いながら、私の官舎のお手洗いまで掃除してくださいました。

川端先生は、長女の賀代子さんがお生まれになると、台東小学校に転勤になり、そのうち二女の渥子さんもお生まれになりました。敷島から台東までは3〜4kmでしたので、私は、日曜日にはよく出掛けて行きました。時には土曜日の午後からお邪魔して、そのまま泊まってしまふこともありました。食事時になると、奥さんは当然のような顔をして、「賀代子、杉田先生のお茶碗出して。」と声を掛けるのです。奥さんは、家族同様に私の食器類一式を用意しておいてくださり、賀代ちゃんもそれを知っていたのです。先生が承知されていたことは勿論のこと



敷島小学校の児童達
子供達の後ろにある植物は航空燃料に混入する油を採った「ヒマ」

前の写真に写っている前列左から3番目に、姓名ともはつきりと記憶している女の子がいます。その子の名は佐藤昌子さん。お父さんは診療所のお医者さん、佐藤先生です。私のいた頃の台湾には変わった制度があって、軍隊の古参衛生下士官や保健所の永年勤続職員などから選抜して、「現地開業医」の資格を与え、総督府の指定した地域内での医療行為を認めていました。台湾における田舎の公医さんには、そんなお医者さんが多かったのです。

その頃の台東地域の農作物は、先ず第1は甘蔗でした。甘蔗とは、砂糖を作るサトウキビのことで、キビ畑は、刈り取りの頃になると、ススキのような白い穂が、一面に出てきて美しい。その間を網の目のように甘蔗運搬の軌道が走っていて、ひっきりなしに甘蔗を運ぶ軽便鉄道が行き来していました。子供達は、最後尾のトロツコの台車から甘蔗を引き抜く競争をしていました。取り入れ時季の懐かしい風景で、今でも目に浮かびます。

ブルブル疎開学園、終戦

1944年になると、台湾の各都市もアメリカ軍の爆撃を受けるようになり、台東庁でも、奥地のブルブルに疎開学園を開いて、希望者を収容するようになりました。川端先生もそこへの派遣を命じられ、家族と赴任されました。1945年には、疎開学園でも、ある程度の食糧自給を考えるようになり、農業経験のある教員を、という事で、私もブルブルの疎開学園に派遣されました。また川端一家の近くで生活することになりましたが、間も無く終戦となり、台東鎮文化国民学校に戻りました。

終戦で台東に戻ったものの、我々独身者には大変な生活となりました。何より

毎日の食事に困りました。以前には食堂と契約するか、寄宿舎の炊事の方に頼んでおけば、どうにか事足りていました。しかし、戦後は、食堂や寄宿舎が無くなり、自炊をしようにも、食材の入手や調理を考えると、簡単な問題ではありませんが、それでも私は、川端先生ご夫妻のご厚意で、同僚達が羨むような生活が出来たのでした。

台東鎮文化国民学校

終戦後、中国国民党軍が進駐し、学校も中国側に接収されました。私は、台東鎮文化国民学校に勤務することになりました。この学校は、私が在職していた台東国民学校と台東宝公学校とが合併して出来た学校です。教職員は62名で、中国大陸から来られた先生を除くと、日本籍と台湾籍とがほぼ半数ずつでした。初代校長になられたのが蔣剛先生。台東庁の教育面の接収のために大陸から来られた接管【接収管理】委員の1人で、年齢は私より少し上だったと思います。接管委員として来られたというのに、温和な人柄でした。台東鎮文化国民学校の校長になられてからも、学校の運営については余り細かい口出しをせず、特に日本人子弟の教育については、一部を除き、日本領時代の日本人前校長に任せてくられていたようです。我々日本籍の教職員も全員、新しい中国側の学校に教職員として留用されることになったので、給料も支払われたし、宿舍も従来どおりの使用が認められたので、生活面での不自由や差別は感じませんでした。加えて、中国国民党蔣介石総統の「暴に報ゆるに暴を以てせず……」の布告も守られていたので、大陸からの帰国者のような、敗戦国民としての、言語に絶する悲哀も味わわずに済みました。

また、蔣剛校長は、どこの国でも子供の教育は1日も忽せには出来ない、と言って、歴史、地理、修身の3教科を除いては、日本の教科書による教育を認めてくれました。これは、上部の方針であったのかも知れませんが、私達にとっては有難いことでした。朝会で中国国歌を歌ったり、自分の姓を中国の発音で呼ばれて面食らったことなどもありましたが、今では懐かしい思い出となっています。

帰国

1946年、帰国の時が来て、私達台東在住者の乗船地として指定されたのは、北方の花蓮港でした。私達は、台東地区の帰国者としては早い方で、3月初めに花蓮港に到着しました。しかし折悪しく、連合国側から軍隊の移動が禁止され、花蓮港乗船地では、一般の引き揚げ日本人の援助に必要な人数の確保が、出来なくなっていました。そこで、「独身の男の何人かは、一般人の引き揚げ完了まで、花蓮港に残ってもらいたい。」との要請がありました。人選の結果、私も残留者の1人として指名されました。早く帰らなければならぬ理由も無かったので、そのまま引き受けました。

私達は、中国側から外出の腕章を貰って、行動の自由を割合認められていました。そこで、引き揚げ船の入港が2、3日途切れて仕事の無かった日に、私達は、花蓮港の市街に骨休めに出掛けました。集合時刻と場所とを決めた後、1人歩きを楽しんでいた私は、街角で見覚えのある顔に出会いました。この間、別れを言って来たばかりの蔣剛校長でした。先生も私の顔を憶えていてくれて、ここにこしながら近寄って来て、早口で何か話し掛けてこられました。しかし中国語を解しない私には、何を言っているのかさっぱり分かりません。私は日本語

で話し掛けましたが、今度は蔣先生が分かりません。どちらもまごまごしているうちに、蔣先生は筆談を思い付かれしました。そこは同文同種の間柄ですから、漢字だったら大体の意味は通じるものです。どんな漢文を書かれたのか、記憶も薄れましたが、私はそれを読んで、「どうしてここにいますのですか。まだ日本には帰れないのですか。」と解しました。私はメモ帳と鉛筆とを受け取って、「帰国日本人為引揚援助」と書きました。先生は私の書いた意味が分かったらしく、頷かれて、今度は、「どこに住んでいすか。」という意味のことを書かれました。私は「在米(倫)日僑連絡所」と書いてみました。先生はこれにも頷いてくださったので、分かったものと思います。その他にも2、3の筆談をしましたが、最後に先生は、「祈健康的無事帰国」と書かれたと思います。花蓮港の街角で偶然再会した蔣剛校長。私より少し年上の方だったと思いますが、台湾のどこかで、今もお元気でおられるのでしょうか。それから約1ヶ月、引き揚げ船の入港の日には、検査の準備と検査後の荷造りの手伝いに追われ、ようやく4月末に、つくば市白井の実家に戻りました。

※旧制土浦中学には台湾からの留学生も学んでいた。中学15回(1916(大正5)年卒業の涂火・涂爐の両名である。涂火は1911(明治44)年4月に第1学年に入學し、涂爐は同年9月に福岡県立朝倉中学校から第1学年に転入學した。在学中は西真鍋の一色氏と近藤氏との「厚意により、両氏宅にそれぞれ下宿していた。両人とも健康に優れ、成績も良く、卒業後、涂火は東京高等商業学校(現一橋大学)に、涂爐は岡山医専(現岡山大学医学部)に進學し、帰国後は台湾の斯界で活躍された。1986(昭和61)年4月28日、涂爐のご遺族が本校を訪れ、涂爐の生涯を纏めた写真集「日新懷念集」を惠贈された。



九三式水上中間練習機の前で教官の説明を聴く飛行練習生
『櫻水物語』より転載

戦時下の土浦中学生19 ～敗戦前後～

戦中から戦後にかけて、旧制土浦中学校では疎開生徒や復員者・引き揚げ者の転入・転出が相次ぎました。1931(昭和6)年生まれ、1944(昭和19)年に帝京中から土浦中に転入、1946年に都立五中(現都立小石川高校)に転学されました。高21回松井泰寿・鴻巣茂が鎌倉市大町のご自宅で、敗戦前後のお話を伺いました。

文中の【 】内は筆者による注記です。

尾久尋常小学校

私の父小佐次は、新治郡山ノ莊村小野【現土浦市小野】の青木葉家の四男として生まれ、矢嶋家へ養子に入り、荒川区尾久で洋服の仕立屋を営んでいました。母は、1935(昭和10)年、私が4歳の時に亡くなり、我が家は、父・姉2人と私との4人暮らしとなりました。1937年、尾久尋常小学校に入学。最初に読んだ国語読本は、「サイタサイタ サクラガサイタ」、「コイコイシロコイ」、「ススメススメヘイタイススメ」で始まっていました。7月には日中戦争が勃発、更に1941年の日米開戦と同時に、日本は、「御稜威【みいつ天皇や神などの威光】遍き大東亞共榮圏の聖業達成」を唱え、大東亜戦争に突入しました。皇国民は、「八紘一字」【はっこういちう】「世界を1つの家にする。」を意味するスローガン。アジア太平洋戦争中に、日本の、中国や東南アジアへの侵略を正当化するために用いられた。】の名の下、聖戦完遂のため、否応無く軍事体制に組み込まれ、少国民と呼ばれた私たち小学生も、皇国民に仕立てられていきました。

1942年4月18日土曜日の昼、ドーリットル中佐を指揮官とするアメリカ陸軍航空軍のB25爆撃機【航空母艦から発進した。】16機が、日本本土を初空襲しました。【ドーリットル空襲】。私は、友達の宮川君と学校から駆け出して【当時、土曜日の午前中には授業が行われていた。】、自宅まで避難し、押し入れに隠れました。尾久の自宅付近の民家も焼夷弾で焼かれ、死者9人、重傷者38人が出ました。近くの東京陸軍兵器廠を狙ったのだと思います。

土浦中学へ

1943年4月、私立帝京中学【現帝京大学系属帝京中学校・高等学校】に入学しました。1944年に入ると戦局が悪化し、家屋の

強制疎開が始まり、近くの家が撤去されたことやドーリットル空襲のこともあって、父の郷里に近い、山ノ莊村小高【現土浦市小高】へ疎開することになりました。尾久から小高まで、家族総出で、荷車を引いての引っ越しでした。

引っ越しを終え、私は、1944年4月に土浦中学2年生【中48回】に編入されました。初めて見た真鍋台の校舎は、東京でも見られないような立派なもので、びっくりしました。小高から徒歩で筑波線【土浦駅と岩瀬駅桜川市岩瀬とを結んでいた筑波鉄道現関鉄筑波商事の鉄道路線。1918(大正7)年に開業し、1987(昭和62)に廃止された本紙第55・56号に既述した。】の常陸藤沢駅【現つくばりんりんロード藤沢休憩所】に出て、真鍋駅【現関鉄本社東側のバス車庫付近】まで乗り、真鍋の坂を登って登校しました。小高から通学していたのは、私と先輩、そして土浦高女生の3人だけでした。



1943(昭和18)年当時の筑波線の常陸藤沢駅
駅舎には「欲しがりません勝つまでは」・「進め一億火の玉だ」の戦時ポスターが貼られている。

(関東鉄道株式会社提供)

英語の最初の授業で、長谷川勝信先生が、「usually」遊女有り」と板書して、

発音の指導をされたことを今でも覚えています。東京育ちで訛りが無かったためでしょうか、発音を褒められ、英語の時間には必ず教科書を読まされました。軍事教練では、三八式歩兵銃を担いでグラウンドを匍匐前進し、藁を巻いた杭をアメリカ兵に見立てて、「突っ込めー!」の号令で突撃しました。刺突に失敗すると、配属将校の鉄拳ビンタが飛んできます。夏休みの宿題には、「我國の軍隊は世々天皇の統率し給ふ所にそある」で始まる『軍人勅諭』全文の暗誦と墨書臨書とが課せられました。

次第に、戦局は逼迫。7月から4年生【中45回】が航空廠(第一海軍航空廠)へ、5年生【中44回】が東京電機或いは中村鉄工所へ通年動員となり、学校が寂しくなりました。私たち2年生も、農繁期の援農作業や霞ヶ浦海軍航空隊飛行場での草刈奉仕、霞ヶ浦造船所【土浦駅東側第2ドックにあった木造船の造船所。敵の潜水艦からの攻撃によって、船舶の損耗が激しくなり、輸送船として、木造船までもが必要とされるようになっていった。】での作業に駆り出され、授業どころではなくなっていきました。

翌1945年1月8日、54歳の父が結核で逝き、矢嶋家の菩提寺である田宿町【現土浦市大手町】の東光寺に葬りました。学業を終えた姉2人が、父のミシンを踏んで、裁縫の賃仕事を始めました。一家の働き手を失った家計は苦しく、中学の先輩から懇請されたこともあり、応召する藤沢村【現土浦市】の少尉に、家宝の備前長船清光の1振りを提供し、米1俵を頂きました。食うためとは言え、先祖伝来の名刀を手放してしまいました。

航空廠(第一海軍航空廠)

1月30日、3年生【中46回・47回】が航空廠へ入廠し、3月には、私たち2年

生にも動員の命が下りました【3月3日に2年生の出動に対する壮行式が挙行され、7日に4学級全員が航空廠へ入った】。遠方で通勤出来ない私たちは、大岩田にあった寮から航空廠に通いました。寮は平屋の2棟建て、1棟が16室、1室12畳の部屋に5人が押し込まれました。

【養成班に次いで教育班での基礎訓練を修了した】私は、飛行機部銅工班宮本組に配属されました。作業は、零戦や九三式水上中間練習機の破損修理、人間魚雷「回天」の整備等でした。水上機のフロート修理では、破損した部分に女子工員が外から金属板を当ててビスを打ち込み、体の小さい私がフロートの中に入ってビスの頭を潰して、金属板を固定しました。

寮生の昼食は、弁当部で作って各職場に配られました。木製の弁当箱で、中身も粗末なもので、私たち中学生は、コジ弁(云食弁当)と呼んでいました。私が当番で受け取りに行くと、炊事のおばさんが、いつも私には2個呉れたので、フロートの中に隠れて食べていました。

2年次の修了式もありません、4月に3年へ進級。5月には土中生7人が選抜され、海軍香取航空基地【現在の千葉県匝瑳市と旭市とに跨る地にあった】へ10日間ほど動員されました。作業は、局地戦闘機「雷電」への電探(レーダー)取り付けです。私は、そこで山口県厚狭出身の福久海軍兵長と知り合い、面倒をよく見てもらい、義兄弟の契りまで結びました。

香取から戻ると、学徒出身の少尉との出会いが待っていました。航空廠での修理を終えた飛行機には、隣接する霞ヶ浦海軍航空隊での試験飛行が行われ、合格すれば戦場に送られ、不合格とされると工場に戻されます。そのため、航空廠の工場へは航空隊の隊員や飛行機を受け取りに来た特攻隊員たちが、修理中の飛

行機を見に顔を出していました。少尉もその中の1人だったと思います。少尉は、私を弟のように思ってくれ、会う度に飛行服のポケットから、「これ、食ってみる!」と、外国製のチョコレートとそつと渡してくれました。航空隊の宿舎に連れて行かれた時には、寝床のハンモックの下で、「平和になったら、岩波文庫の一つ星を読め。」と奨め、伊藤左千夫の『野菊の墓』のストーリーを話してくれました。寮の門限を心配して、早めに送り出してくれましたが、私のポケットはお菓子で膨らんでいました。しかし、少尉は、突然姿を見せなくなりました。菊水作戦で沖繩へ特攻出撃し、散華されたことを半月後に知りました。

敗戦

8月15日は、朝から焼けるように暑い日でした。正午前、格納庫前の広場に集められ、玉音放送を聴きました。前方では、普段見かけない将校たちが、妙な顔をして整列していました。ラジオの音が消えると、啜り泣きの声が聞こえてきました。

8月20日、男子学徒・女子工員の退廠式【女子学徒と女子挺身隊員とは18日に退廠した】が行われ、2年生以上の航空廠出動土中生も、式に臨みました。翌日、私たち土中生は、第二工員宿舎前で物資の特配を受け、毛布を担いで寄宿舎を後にしました。

東京へ

父が亡くなってから、姉2人が、近所の繕い物などの裁縫仕事で生計を立てていましたが、私の授業料も払えない状況になり、翌1946年に、焼け残った東京の実家へ戻ることにしました。食糧難のために、東京への転入抑制策が採られていて、転入が認められない状況でしたが、姉が、両親が居ないから、と区役所に頼

み込んで、漸く転入が認められました。空襲を免れた、人に貸している実家の1間を空けてもらい、3人がそこで暮らすことになりました。

私は、都立五中の3年生に編入してもらいました。本来ならば4年生ですが、勤労働員等で授業を受けていないので、五中の校長が、3年が適当だと判断したようです。五中に編入はされましたが、極度のインフレで生活が苦しく、五中に通う余裕はありません。中華料理店の小僧、サロンボーイ、肉のスエヒロの小僧等々、とにかく食うために、何でもやりました。アメリカ軍の軍用品の横流しもしました。これは、新宿の帝都座5階の劇場で、劇団「空気座」の『肉体の門』を観ていた時に、アメリカ軍の軍曹から声を掛けられたのがきっかけでした。私は演劇が好きで、なけなしの金を叩いては劇場に通っていたのです。片言の英語で

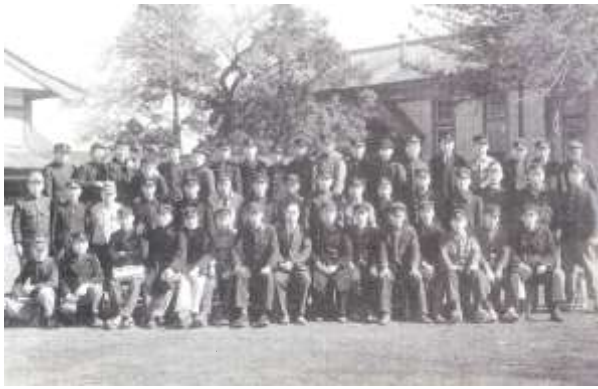
答えたら、英語が分かると思ったらしく、彼が横流ししてくる、米軍の軍服・靴・靴下、石鹸・タバコ等の軍用品を売り捌いてくれ、と言うのです。売上金は折半で良い、との条件でした。そこで、新橋や横浜桜木町の闇市で売り捌きました。が、桜木町でアメリカ軍のMP【Military police】に見付かり、職安【現ハローワーク】のトイレに隠れたこともありました。

その後、食うために、20数種の職に従事しました。その間、五中には行けず、除籍になったようです。何とか落ち着いてくると、大学に行きたくなりました。土浦中学に学歴証明をしてもらい、大学入学資格検定を受け、1951(昭和26)年、早稲田大学文学部2部(夜間部)に入学しました。親類から、「お前の顔では演劇は無理だ。」と言われ、仏文を専攻しました。昼は厚生省大臣官房総務課に勤め、夜は大学です。しかし、ここでも学

費が続かなくなりました。総務課の課長が援助を申し出てくれましたが、人の情けは受けられない、と断り、義兄弟の契りを結んだ厚狭の福久さんからの「山口に來い!」との誘いも断りました。大学にも行けなくなり、職場も水道橋の結核予防会に変わりました。水道橋は神田の古本屋街に近く、そこには出版関係の会社もたくさんありました。そのうち、出版の仕事がしたくなり、予防会を辞めて、小さな新聞社の校閲部に入りました。出版の仕事が性に合っていたようで、その後、中央公論、筑摩書房、番町書房を経て、新潮社に入社しました。

新潮社でも校閲部で、文庫・新書・選書から週刊誌(『週刊新潮』や『フォーカス』等)まで、殆どの出版物の校閲に当たりました。校閲とは、誤字脱字のチェックは勿論、文章の内容が正しいものかどうか、事実確認をする仕事です。そのため、校閲の仕事は、細かい作業の繰り返しになります。人名や地名、歴史的な内容、数値等の記載事項が正確か否か、様々な参考資料に当たって確認していきます。更には、読者を不快にさせる表現や誤解を招くような表現がなされていないか、差別語が無いか、ということろまで細かくチェックしていきます。校閲は、集中力と根気との要る仕事ですが、読者が安心して読める紙面を作ろう、と取り組みました。多少なりとも、洛陽の紙価を高め、新潮社の出版物の質を支えることが出来たのではないかと、と自負しています。

60歳で定年を迎えると、岩波書店から誘いがあり、広辞苑の校閲や漱石全集・荷風全集等の日本文学全集の校閲・出版に携わり、73歳まで勤めさせていただきました。



中48回5年3組 クラス写真

1列目の中央が担任の広瀬正雄先生

土浦中学生20～復員、土浦中学編入～

戦中から戦後に掛けて、旧制土浦中学校では疎開生徒や復員者・引き揚げ者の転入・転出が相次ぎました。今号では、満州鞍山中学から大分陸軍少年飛行兵学校に進み、復員後、土浦中学に編入、高1回生となった大貫和邦氏から、高21回松井泰寿・鴻巣茂が、2019(令和元)年5月21日に進修学習館で伺ったお話を紹介します。

文中の【 】内は筆者による注記です。

高井戸から鞍山へ

私は、1930(昭和5)年1月に生まれ、父市郎は、土浦中学を1918(大正7)年3月に卒業【中17回】すると、満鉄(注1)に就職しましたが、その後、帰国して警視庁に勤務していました。1940年、満州国鞍山市(注2)にあった昭和製鋼所に転職し、再び満州に渡ることになりました。私が小学5年になる時で、東京市立高井戸第二尋常小学校から鞍山の千歳小学校に転校となりました。父、母、姉、妹、姉の6人で、東京から神戸までは東海道線を利用し、神戸港からは船で大連に渡り、大連から鞍山までは満鉄の列車で行きました。5、6日は掛かったと思います。女学校に在学中であった長姉満佐子は、卒業後に渡満し、同製鋼所に入社。その後、職場の同僚と結婚しました。

鞍山は、満鉄が開発した都市だけに、整然と区画された日本人だけの町と昔から住んでいる中国人の町とに分かれていました。満鉄によって、同社の附属地(注3)に設置された日本人子弟対象の学校は、千歳小学校を含めて、小学校だけでも5、6校はあったと思います。鞍山の気候は大陸性気候で、夏は30℃を超え、冬は氷点下20℃に達する時もあります。そのため、冬は家庭に氷を張らせ、体育時にはスケートをしました。住宅は煉瓦造り3階建てのアパートで、二重窓、水洗トイレの、暖房設備完備の立派なものでした。学校にも、冬には石炭を焚いて蒸気を通すチーム暖房が設置されていて、それほど寒いと感じたことはありません。

1942年、鞍山中学校に入学しました。同校は、ラグビーの強豪校で、全国大会に何度も出場していました【1935年の第17回全国大会決勝戦、同校3対3台北一中、引き分けにより両校優勝。1941年第23回大会準決勝、同校3対5台北一中、決勝は台北一中5対0福岡中】。そのため、始業前にはラグビーをさせられ、また【冬には、同校でもグラウンドがスケートリンクになった】。放課後の私は、バレーボール

に夢中でした。実業団の昭和製鋼所チームの選手たちと一緒に練習する機会が、屢々あったからです。同チームは、1940年の日本選手権で優勝し、「全日本」のタイトルを初めて海外へ持ち出していました。チームの中心選手で、全日本チームのメンバーでもある佐藤賢吉選手も、教えに来てくれました。同選手は、当時としては画期的であった移動攻撃を編み出した選手で、そのプレーはまさに神業でした。姉文子は、鞍山高等女学校で校旗の旗手として、全校生徒の先頭いつも立っていました。そのため、先輩たちは何とか姉に取り次いでもらおうと、私に優しくしてくれました。しかし、姉にはそのことを一言も話せませんでした。素敵な姉でしたが、私が大分の少年飛行兵学校に在学中に病気で亡くなりました。死にも目にも会えないばかりか、お葬式にも出られませんでした。

大分陸軍少年飛行兵学校入学、敗戦

1944年4月、鞍山中学2年修了で、東京陸軍少年飛行兵学校大分教育隊に入学しました。とにかく飛行機に乗りたかったのです。しかし、飛行機乗りは死を覚悟しなければなりません。両親は、長男の私の我が儘をよく許してくれたと思います。

同隊は、1943年10月に現在の大大分市王子新町に設置され、翌年5月に大分陸軍少年飛行兵学校に昇格しました。生徒定員2000人で、本土決戦に向けての特攻要員としての教育と訓練とが徹底して行われていました。1945年8月15日には野外演習に出ているので、終戦の詔勅を聴くことはできませんでした。演習を終えて学校に戻ると、上官から敗戦を告げられ、切符【国鉄・私鉄を問わず、自由に乗車できる乗車許可証のようなもの】を渡され、即時解散・復員を命じられました。班員全員が、呆気に取られ、悔し涙を流す間も無く、それぞれの故郷に向かいました。私は、満州に帰ることもできず、途方に暮れていると、同期の友人が、「佐渡島へ一緒に来い」と誘って

くれました。日豊線、山陰線、北陸線と乗り継いで新潟まで来ましたが、沿線の都市は、殆どが空襲を受けていました。それでも、鉄道は何とか動いていました。佐渡では、友人の実家の旅館の手伝いをしながら、ぶらぶらしていました。暫く厄介になりましたが、母の実家のある真壁郡大和村【現桜川市】へ帰ることに決め、船で新潟へ渡り、そこから上越線へ高崎へ、高崎から両毛線へ小山へ、小山からは水戸線へ岩瀬へ、とやって来ました。母の実家で1ヶ月ほど暮らして、父の実家のある土浦にきました。年の瀬も迫っていたと思います。西真鍋の実家には祖母のくらが、1人で暮らしていました【祖父大助は日露戦争で戦死した】。祖母は、私の姿を見て、驚くばかりで、暫く口も利きませんでした。

家族の安否は全く分からず、祖母との2人暮らしが始まりました。祖母の遺産年金だけでは暮らしていけないので、深谷製作所の職工として働き始めました。変圧器を製造していたと思います。しかし、戦後のインフレが激しく、どうにもならなくなったので、家にあつた古着を売ることにしました。東京の方が高く売れるだろうと考え、配給制であった切符をやっと手に入れて、翌日には売りに行こうとしていた日に、父・母・弟・妹と、満州で生まれ2歳になったばかりの聡子(としこ)の5人が無事に帰って来ました【姉満佐子は、夫の実家がある大分へ行った】。父は、シベリア抑留を危機一髪のところまで逃れて、帰国できたそうです。1946年8月でした。

土浦中学排球(バレーボール)部創設
帰国後、土浦市役所に勤務することになった父は、「土浦中学へ行け」と言いました。父は、知り合いの沼田謙三郎先生【中16回・社会科】に相談に行き、同先生から、在籍証明さえあれば、転入が可能であることを教えてもらいました。そこで、私が、鞍山中学の在籍証明を貰おうと、と外務省へ手紙を出すと、少年飛行兵学

校の在籍も加えたのか、「鞍山中学4年修了」の証明書を出してくれました。

1947年4月、土浦中学5年【中48回】に入が認められました。5年3組、担任は英語科の広瀬正雄先生【中25回】でした。

前年後半には、土浦中学も落ち着いてきて、部活動も復活し始めていたようです。私は、転入が許可されると、早速、バレーボールを始めたい同級の小野茂君たちと部員集めに奔走し、30数名を集め、創部に漕ぎ着きました。この頃の様子を小野君は、1996(平成8)年に発刊した、創部50周年記念誌『桜水』に次のように記しています。

「排球部を創ろうという機運が芽生えたのは、昭和21年の後半であった。体育の授業に排球を取り入れ、人集めに熱い思いを滾らせていたのは、故岡田良典先生【中33回】であった。先生は、それこそ毎日、チームの練習に立ち合い、指導してくださったのである。学徒動員先の第一海軍航空廠から帰ってきた私共の進路を誤りなく指導する、その為には、『強靱なる精神』を創り上げねば、と考えられ、家庭も、校務の一部も、お友達との付き合いも投げ棄てて、一途に全力を投入されたのである。このことは、先生の同期の竹中一郎氏から聞かされ、初めて、先生の教育へのこよなき情熱と生徒への愛情を知り、私共は発憤、一層練習に励むこととなり、徐々に力を付け、やがて栄光を掴むこととなる。」と。

ハンドボールの全日本メンバーにも選ばれたこともある入江信太郎先生【中35回】や宮本西嗣先生【中40回。土浦二高に勤務しておられた。】も、ハンドボール部への指導の傍ら、私たちにも助言や激励してくれました。まだ9人制の時代で、コートもグラウンドに設けられていました【福岡国体のコートもグラウンドにあった。】。現在の鉄棒付近にありましたので、野球部のボールがよく飛んできて、野球部の連中から「ボール取ってくれ！」と怒鳴られたものです。ボールも僅か3個、何もかも不

足していましたが、バレーでできる喜びで、何の不自由も感じません。私が鞍山中学で佐藤選手から教わったバレーを紹介し、みんなで研究もしていました。

県制覇、そして福岡国体へ

1948年3月5日、中学48回生の卒業式が挙行され、バレー部結成初年度の幾多の苦難をともにしてきた飯村宗男・大川春郎・田部井登美弥・内野勇・小野茂など、土浦一高に進まなかった同級生は、真鍋台の校舎を後にしました。

同年4月、新制土浦一高が発足しました。48回卒業生で、一高への進学を希望する者には、3年への編入が認められました。私は、バレーを続けたい一心で、一高に入りました。新学期が始まると、県制覇をモットーに、本格的な練習を始めました。市川家正主将を中心に、毎日、日が暮れるまで猛練習を続けました。そして、県制覇の最初のチャンスである春の高校選手権に臨みました。が、準決勝で、宿敵水戸商業にまたも苦杯を嘗めました。この悔しさを晴らすべく、夏休み返上で練習に明け暮れました。

9月5日の県民大会の決勝戦で、三度【みたび】、水商と対峙しました。何としても雪辱を、との気合いが空回りしたのか、凡ミスが続き1セット目を失ってしまいました。それでも、私たちの士気は衰えず、ハンドボール部その他多数の応援を得て、勇気百倍、2・3セット目を連取して、宿敵を破り、県制覇と国体出場との栄誉を得ることができました。

第3回福岡国体のバレーボール競技は、福岡市と久留米市とで開催されました

【10/30】。岡田先生が、同級生の方々に声を掛けて、遠征費を何とか工面してくれました。

10月18日の朝礼の際に、バレーボール部への壮行会が行われ、全校生徒の応援を受けて、私たちは決意を新たにしました。27日だったと思いますが、各自、米を持参して、土浦駅を出発し、東京駅12時発の国体専用列車に乗り込みました。引

率は岡田先生。ハンドボール競技の役員であった入江先生も一緒でした。列車には、東日本各県のチームが同乗していました【茨城県一般男子チームは、オール日立だった。】。国体専用列車でしたので、座席は確保できましたが、24時間も列車に乗り続けるのは、大変でした。3年前に大分から復員した時には、何の希望も無く、これからどうなるのか、と暗澹たる想いで乗車でしたが、今回は、バレーボール仲間との語らいに、時が経つのを忘れるほどでした。福岡国体では、2回戦で三重県神戸商に敗れましたが、他県の名選手の手を学びました。その結果、県総合選手権では、準決勝で日立製作所多賀工場チームには敗れましたが、県南選手権では、日体大を破り、県南に覇を唱えることができました。

こうした結果を残せたのは、岡田先生の病軀を押しての指導と激励、藤澤留夫先生【中38回。土浦二高に勤務しておられた。】、入江先生・宮本先生の助言、大川・小野両君の励ましに加えて、部員一同の努力があったからだ、と思います。今、思えば、バレーボールに明け暮れた土中・一高生活でしたが、何物にも代え難い、幸せな2年間でした。

1949年3月5日の卒業式、今度は、土浦一高の卒業証書を頂きました。卒業後は、代用教員として、山ノ荘村立山ノ荘中学校(現土浦市立新治学園義務教育学校)に1年間勤めました。バレーボールを教えられるということで、重宝がられたようです。翌年4月、日本専売公社【現JIT】に就職し、東京勤務となりました。会社でもバレーボールを続けていましたが、卒業と同時に、一高のOBで「桜水クラブ」を結成し、茨城県選手権の一般の部にも出場していました。1951年には高2・3回のメンバーを加えてチーム力が上がり、県選手権で日立製作所を破って、全日本9人制バレーボール総合選手権大会【1927年から開催されている9人制バレーボールの日本選手

権大会】に出場することができました。大会では、後にミュンヘンオリンピック男子バレーボール優勝監督となった松平康隆選手がいた日本鋼管に、こてんぱんにやられました。今では良い思い出になっています。

(注) 満鉄

満鉄南満州鉄道株式会社は、日露戦争で日本が獲得した東清鉄道の一部(長春から旅順まで)と付属利権の経営のため、1906年(明治39)年6月に設立された半官半民の国策会社で、初代総裁は後藤新平。同年8月、鉄道の他に、撫順炭鉱・鞍山製鉄所を中心に、交通、鉱工業、商業、拓殖などの経営を政府から任されることになり、日本軍による満州経営の中核となっていた。特に、1931(昭和6)年に発生した満州事変以降は、全満州に勢力を伸張し、一大コンツェルンを形成した。鉄道部門は、その翌年の満州国成立に伴い、同国有とされ、満鉄が委託経営をした。1937年に重工業部門を満州重工業開発に移譲したが、1945年、敗戦により全資産を接収された。

(注2) 鞍山市

遼東半島の付け根にある都市で、古くから、鉄の産出地として知られている。現在でも、中国最大の製鉄所があり、「鋼都(鉄の都)」の異名を有している。(1905年の日露戦争の後、満鉄が、鞍山付近で鉄の大鉱脈を発見し、撫順の石炭と鞍山の鉄とを利用して製鉄を意図して、1918年に鉄道付属地内に鞍山製鉄所を設立した。満州国時代の1933年に「昭和製鋼所」と改称され、八幡製鉄所に次ぐ生産量を誇っていた。)

(注3) 満鉄附属地

20世紀前半の満州に存在した南満州鉄道の所有地。所有権のみならず、行政権をも行使した。日本は、1905年のポーツマス条約の規定により、ロシア帝国が経営する東清鉄道の南満州支線を継承した時に、鉄道附属地(行政権や治外法権をもつ)鉄道会社の所有地)制度もそのまま受け継いだ。満鉄が同社の附属地内で行った行政活動は、学校、病院、公園、職安、消防、宿泊施設の運営など多岐に亘っていた。



弓道部中41回卒業生(1942年3月)(右上) 弓道部顧問の齊藤文雄先生(前列左から2番目)と山崎利市先生。後列左から2番目が加藤雅彦君。
亀城公園を出発する中41回生(香取・鹿島方面剛健自転車旅行)(下)
(いずれも、「中41回卒業アルバム」より転載)

戦火の中で

中41回生は、アジア太平洋戦争開戦後の1942(昭和17)年3月の卒業。それぞれの道を歩み始めましたが、法改正により、1943年から兵役編入年齢が19歳に引き下げられたため、彼らは、1944年後半からは続々と入営し戦いに赴きました。今号では、つくば市小田在住の加藤雅彦先生から伺ったお話(2019年9月13日、ご自宅で、高21回松井泰寿・鴻巣茂が、先生の山口小時代の教え子である大久保勝弘氏とともに伺った。)と中41回卒業52周年記念文集『花筏』(1994年発行)とから、中41回生の足跡を追ってみます。文中の【 】内は筆者による注記です。

土浦中学入学

私は、1925(大正14)年生まれで、1937(昭和12)年4月、小田尋常小学校から土浦中学に進学しました。通学は自転車。小田からは大関(旧姓岡田)清・広瀬昇と私。斗利出から大芦進。藤沢から田崎武男・野口六弥・福島寛が加わり、7人で国道125号を5年間、雨の日も風の日も、真鍋台まで往復約30kmの道程を通い続けました。入学当初の私は、身体が小さく、サドルに腰掛けるとペダルに足がやっと届く程度で、身体を左右に揺すって自転車を漕いでいました。その後ろ姿を見て、父親は心配でならなかったそうです。当時は、国道と雖も砂利道で、その上しよつちゅう工事で掘り返していたので、道路凸凹部にハンドルを取られ、自転車から転げ落ちて、工事現場に突っ込んでしまったこともあります。冬になると、霜解けで泥がタイヤにこびりつき、思うように走れません。帰りは筑波風が向かい風となり、真冬でも大汗を掻いて帰宅しました。入学した年の7月7日から日中戦争が始まりましたが、中学生生活は、まだのんびりとしたものでした。家での予習・復習などとしたことがなく、成績は中の下くらい、漸く進級できた程度でした。

弓道部

部活動は、身体が小さかったことや父が弓道をやっていたことから、弓道部に入りました。「弓道部」の活動は1932(昭和7)年頃から始まり、1939年4月に進修会生徒会から部として正式に認められた。3年生とになった1939年の2学期には、中国戦線出征していた教練科の山崎利市先生が帰還され、顧問に就任されました。修養に修養を積んだ立派な精神と素晴らしい腕前の山崎先生が、毎日熱心に指導してくれましたので、部員の進歩には目を見張るものがありました。山崎先生と一緒に、練習に、競射に、一心に励んでいる放課後、

的の中の快音を聞くのが何よりの喜びでした。

最上級生となった1941年には、第5回帝國商業主催靖国神社奉納全国中学校弓道大会【出場30校】に出場しました。土浦発6時47分の列車で上京。会場は能楽堂前仮矢場。選手は、いずれも5年生の矢口保・山崎文男と私の3人。矢口・山崎は調子が良く、山崎は個人戦優勝戦も争いましたが、惜しくも敗れました。私の調子が悪く、団体としては12射中5中で7位に終わってしまいました。私にもう少し的中して入賞できた。私にもと帰りの車中で敗残の兵の無念を噛み締めていました。

香取・鹿島方面剛健自転車旅行

土浦中学では、5年生での関西への修学旅行が恒例となっており、生徒たちの最大の楽しみとなっていました【先生方には最大の苦労となっていたようですが】。私たちが、当然実施されるものと思っただけで、待ち焦がれていました。しかし、どういうわけか、関西旅行は取り止めになってしまいました。私たちが不始末を仕出かしたわけでもなく、今もって理由は分かりません。それに代わって、1泊2日の自転車旅行が行われました。1941年6月27日、霜降りの夏服にゲートルを巻き、肩から水筒を掛けた私たち5年生は、亀城公園を出発。凸凹の砂利道に自転車を走らせ、佐原に向かいました。香取神宮を参拝。その夜は鹿島神宮門前の旅館に宿泊しました。夕食に鯉の洗いが出ましたが、雷魚の洗いだっただけという話もあります。翌朝、鹿島神宮を参拝して土浦に戻りました。全行程120〜130kmはあった筈です。私たちは、関西旅行が中止になった腹癒せもあり、体力に物を言わせてぶっ飛ばす者もいて、引率の先生方はさぞお疲れになつたと思います。生徒の中にも尻が痛くなつて閉口していた者もいましたが、私は、日頃の通学のお蔭か、何ということはありませんでした。

卒業

アジア太平洋戦争開戦の興奮が冷めやらぬ1942年3月に土浦中学を卒業し、私は、日立鉦山工業技術員養成所に入所しました。鉦山技術者を養成する学校で、日立市の諏訪台に校舎があり、生徒数は150人ほどで、各地の鉦山技術者の子弟や鉦山会社から派遣されてきた社員など、年齢差のある生徒が全国から集まっています。校舎と棟続きに寄宿舎が建てられており、全員が寄宿舎に入っていました。学費と寮費は日立鉦山側が負担してくれて、小遣いだけを家から送ってもらいました。寄宿舎では1部屋に2〜3人が入り、年長者が部屋長を務めていたと思います。養成所での講義に加えて、本山での採掘、大雄院での精錬実習もありました。鉦山では何千人もの工夫や作業員が働いており、日本有数の軍需産業であることがよく分かりました。日曜日に日立出身の生徒の実家を訪れたり、映画を見に行くくらいで、他にすることもないので、寄宿舎では毎日勉強をするようになりました。そのためか、最初の試験では学年で4番になり、自分でもびっくりしました。卒業時も7番。土中時代には考えられなかった成績でした。1943年の4月に日立鉦山精錬課に就職。大煙突のあった大雄院の精錬所で働き始めました。しかし、漸く現場の仕事に慣れてきた1944年に19歳で現役召集され、世田谷の野戦重砲連隊に入営しました。幹部候補生グループで初年兵教育を受け、尚且つ甲種幹部候補生にされてしまいました。これは、土中の山崎先生のお蔭(「教練」の成績を良くしてくれていたのだと思います)だと、今でも感謝しています。その後、桐生にいた鉄道部隊に配属替えとなり、そこで終戦を迎えました。私は、召集されたお蔭で、日立の空襲や艦砲射撃に遭わずに済みました。更に、戦地には行かず済みました。同級生の中には戦死した者

や外地で苦勞した者もいます。私は本当に運が良かったと思つています。

死線を越えて

中41回生の中には、外地で終戦を迎えた者も多数いました。1944年に応召した樋野水雄は北京郊外の万里の長城の八達嶺で、梶田豊は河北省石家荘で、1945年3月に東部第三七部隊【水戸】に入隊して、最後の外地往きとなった菊池英雄は山東省青島で、それぞれ敗戦の悔し涙を流しました。また、松井泰雄は、宇都宮高等農林学校(現宇都宮大学農学部)から、1944年に陸軍特別操縦見習士官に志願し、熊谷陸軍飛行学校教育隊で特攻訓練を受けた後に、同年末に南方派遣を命じられました。しかし、台湾沖で輸送船が敵艦機に襲撃を受け沈没、漂流9時間半、海防艦に救助され、台湾に上陸。1945年3月に歩兵連隊に転属を命じられ、そこで終戦を知りました。幸い、彼らは同年末から翌年半ばまでには復員できましたが、満州で終戦を迎えた大関(岡田)清・前原文雄・横山恵一らは、シベリア抑留の苦難を強いられました。シベリアでの抑留生活を横山恵一は、「シベリア回想(『花筏』所収)」と題して次のように綴っています。

「戦後五十年。あの悲惨な戦争も、人々の記憶から忘れ去られようとしている今の平和な日本。

六十九年の齢を重ねた私の人生からみれば、一年八ヶ月のシベリア抑留はほんの短日時と言えるが、人間の極限状態にあった『ブカチャヤ収容所』での体験は、今なお一生涯の忘れ得ぬ思い出として、脳裡に焼きついて離れない。

三重の鉄条網に囲まれた異境の地で、故郷を、帰国を夢見ながら無念の涙を流した、尊い犠牲者千数百名(収容人員の約四分の一)。一人一人の悲痛な心の叫びが聞こえてくる思いである。

零下三十度を超す厳寒の山林での伐採手や足の感覚がなくなるが、凍傷を防ぐために休むわけにいかない。絶えず身体

を動かして寒さに立向かう。はかどらぬ作業に口助【ロシア兵】が自動小銃で威嚇する。言語に絶する苛酷な作業。

ノルマ(割当て)に追われる石炭採掘積込作業。ノルマ達成が帰国に繋がる唯一の道と信じ体力の限りを尽くす。シヤベルが上からずトロッコに入るのは二分の一、三分の一。「ダバイ(早く)」。口助の鋭い声が飛んでくる重労働の毎日。

こんな中で唯一の楽しみが食事。白樺の皮を燃やした鈍い光りの下で黒パンを十数等分に切る。ギラギラした瞳がこの一点に集中する。何ともいえない重苦しい空気。一片の黒パンに数十粒の大豆が浮いたスープ。最悪最少朝晩二回。これが生命を支える尊い食物。

極寒。重労働。飢餓に苛まれ、虱の媒介による発疹チブスや栄養失調による死亡者が日に日に増える。素裸でコチコチに凍った遺体を枯木を重ねるように墓穴に埋める。こんな悲惨な、残酷なことがあつてよいものだろうか。

頑健な私も、心身共に使い果たし、栄養失調で瘦せ衰えついにダウン。目を覚ますと、まだ生きていたか、とやり切れない入院生活三ヶ月。

この入院が幸いし、病人として二十二年四月引揚五船目で故郷の土を踏むことが出来た。」

友を悼む

しかし、再び故郷の土を踏めなかった者もいました。そうした友を悼んで山口裕は、『花筏』に「目黒静君のこと」と題する一文を寄せています。

「太平洋戦争では多くの友を失った。生きていたら輝いたであろうにと思う。その中でも今も多くの友人の追憶に生きている人物に目黒静君、富岡崇吉君がいる。目黒君は私にとつて因縁が深いので、特記することにした。

彼とは中三を除いて同クラスで、【石岡から常磐線での】汽車通学では加茂川【廣行】君と三人いつも一緒であつた。勉強以

外のことで、いろいろ教えられることが多かった。彼の頭脳明晰さは格別ながら、そのストウイックな人柄、理化学的知識や理解、趣味と教養の深さも格別であつた。

海軍経理学校在学中、日曜日には屢々世田谷の小生の居所を訪ねてくれた。その時の話題はいつもサイエンスで、飛行機、望遠鏡、無線、天文、化学、音楽等々尽きなかつた。海経【海軍経理学校】の八ヶ岳登攀訓練の折の眼下の雲海に映る円形虹の話も印象に残っている。ブロッケン(の怪物現象)だつた。北アルプスの尾根路でのこの現象を見る度に彼を思い出す。昭和十九年三月、海経卒業の彼は、戦艦武蔵乗組で出陣したが、そこで【同級の】田上松男君のお兄さんと遭つていゝ。その年の秋、彼は呉鎮【呉鎮守府】所属の第三十号掃海艇の主計長としてレイテ作戦に赴いたが、その後の消息は不明であつた。戦争は最終段階に入り、小生は海軍薬劑科短現【短期現役士官】(註2)で呉海軍病院配属となつた。病院は銃爆撃で破壊されたが、三たび奇蹟的に助かつた。

ある時、第二十九号掃海艇の衛生兵曹が治療品受領に來た。心躍り第三十号掃海艇の消息を尋ねたが、オルモック水道で沈んだらしいとのこと、目の前が暗くなつた。戦後調べたところ、そこはレイテ島とセブ島の間で【1944年】十一月十二日のことであつた。小さな島の多い所で、もしやどこかに泳ぎ着いているかもしれぬと思つていたが、彼は帰らなかつた。

戦後分かつたことだが、小生が呉で銃爆撃を受けていた頃、加茂川君【海軍兵学校73期】は港内の空母葛城の高角砲分隊士として敵機を迎え撃ち、危機の中にあつたことや、呉病院に収容された二六〇〇名余の重傷者の中で見た少年兵が彼の部下だつたことを知つた。戦争のさ中でも、いろいろな因縁があるものだ。

目黒君戦死の状況記録探索の中で、富岡君【海軍兵学校73期】が二十年四月七日、

神風特攻第三御楯隊長として、奄美大島近海の空母バンコックの艦隊に突入散華したことが分かつた。

太平洋戦争は多数の前途有為の人材を徒に死なせてしまった。生きていれば戦後の日本で輝いていたであろうに、と今尚悔やまれる。戦争指導者達は勝算のない自棄的な戦略で、戦争終結のシナリオも無く、ポツダム宣言の中の戦争責任追及の文言に怯え、内に対しては面子にこだわりの、都市焦土化、特攻、原爆という破局にのめり込み、大日本帝国を滅亡させた。今我々の生きる日本は、過去の体制とは根本的に違うという認識を持つていたが、若くして大日本帝国に殉死させられた友人達を忘れることはできない。目黒君は今所沢市聖地靈園に両親と共に眠っている。戒名『彰光院義岳静海居士』として。」

(註1) 日立鉱山

茨城県日立市にあった鉱山で、主に銅と硫化鉄鉱を産出した。1905(明治38)年以前は赤沢銅山と呼ばれていた小鉱山であつたが、同年、久原房之助が経営に乗り出し、日立鉱山と改名され、本格的な開発が開始された。久原の経営開始以後大きく発展し、同年から、閉山となる1981(昭和56)年までの76年間に、約300万トンの粗鉱を採掘し、約4万トンの銅を産出した日本を代表する銅鉱山の一つとなつた。日立鉱山を母体として久原財閥が誕生し、久原財閥の流れを受けて日産コンツェルンが形成され、また日立鉱山で使用する機械の修理製造部門から日立製作所が誕生しており、日立鉱山は日本の近代産業史に大きな足跡を残している。

(註2) 短期現役士官

大日本帝国海軍が旧制大学卒業生などを対象に、特例で、現役期間を2年間に限って採用した士官のこと。正式には二年現役士官と呼ばれる。「短期現役短現」という呼び方は俗称で、本来は、徴兵制度の特例で師範学校卒業生を対象とした短期現役兵のことを指す。二年現役士官の制度は、海軍士官のうち兵科機関科以外の部門である将校相当官について設けられ、軍医科・歯科医科・薬劑科・技術科・主計科・法務科などがあり、特に、アジア太平洋戦争中の短期現役主計科士官が知られる。

土浦中学から土浦一高へ1 ～終戦直後の真鍋台～

8月15日の正午、学徒たちは動員先や学校或いは自宅で、玉音放送を拝聴し、長い戦いの日々が終わりました。今号から、戦後の土浦中学から土浦一高への歩みを『進修百年』、屋口正一(中48・高1回)著『櫻水物語 戦中派の中學時代』・『続・櫻水物語 終戦直後の中学生生活』・『櫻水物語(三) 土浦一高元年』などから辿ってみます。

引用文中の【 】内は筆者による注記です。

1945年8月15日

8月15日正午、終戦に係る勅語の放送(玉音放送)がありました。その日の土浦中学の教務日誌には、次のように記されています。

- 一、午前五時半、空襲警報発令セラレ、九時解除。
- 一、正午ヨリ、御親詔ノ御放送アリ。職員生徒謹ンデ拝聴、其後学校長訓話アリ。
- 一、午後一時半ヨリ、職員常会。

その時の学校の様子を、当時本校英語科教諭であった小沢永次郎(中33回)は、『進修同窓会報』第26号(1980(昭和55)年12月発行)に「終戦直後の思い出」と題して、次のように述べています。

「午前中から、正午に重大放送がある、とラジオは予報していたが、われわれ在校していた職員・生徒【1年生、2年生以上は第一海軍航空廠などに勤労働員中であつた。】は、玄關後のラジオのあるところに集まつた。正午になると、例の『耐へ難キヲ堪へ、忍ヒ難キヲ忍ビ以テ万世ノ爲ニ太平ヲ開カント欲ス。』の天皇の放送があつたが、これを我々と一緒に聞いていた校長は、不思議そうな面持ちで、『何のことだか判らない。』とぼやいて校長室へ入つて行かれた。その直後ラジオは、天皇放送の解説があつたので、降伏を受諾したことがわかつた。誰もが一応は精神が張りつめていたので、この放送を聞いて肩を落とし、力の抜けた様子は否めなかつた。」

また、第一海軍航空廠に動員中であつた中45回高橋邦男(1945年3月、4年修了で繰り上げ卒業となつていたが、動員は継続されていた。飛行機部所属)は、『戦いのなかの青春』に次のように記しています。

「戦局が厳しくなつてきた七月初旬、零戦脚部修理班は、工場疎開のため、荒川沖【駅】東側の民家に、工場を移して作業をすることになった。」

駅より近いため、通勤には便利となつた。しかし、運命の八月一日を迎えることになった。当日正午に、玉音放送があるから、中庭に集合するよう、指示があつた。

三〇人位いた工場関係者が集まつて、玉音放送を聞いたが、当時のラジオは雑音がひどく、最後部にいた我々は、正直いつて何の話か、内容が全然解らなかつた。『戦局が不利なので、国民は全力を挙げて、戦争に対処すべし』と、勝手に解釈していた。

ただ、最前列にいた技術将校が、青い顔をしながら『チキシヨウ!』と叫んだのを覚えてる。やがて班長から、戦争は負けて終わったと聞かされたが、実感が湧いて来なかつた。負けたと実感が湧いてきたのは、自宅に帰つて、家族が泣いていたので解つた。」

同じく第一海軍航空廠に動員中であつた茨城県立麻生中学校の生徒を引率して来ていた教員の、隊長(校長)への報告日誌には、

七月二九日在籍者八九名。

八月一日(水)【入廠以来】三八九日

正午、天皇陛下におかせられては、御自ら御放送、時局收拾に関する詔書拝聴。皆泣く。

八月二一日(火)三九五日

一同涙にて【麻生へ】引上ぐ。と記されています。

学校再開

終戦にはなりましたが、学徒たちは動員先に通いました。

「二六日一空廠【第一海軍航空廠】内は落ち着かなかつた。午近く味方戦闘機が低空で飛来、降下をくり返してはガリ版刷りのピラを空から散布した。工員も学徒もそれを拾つては二人三人と集つて読み返した。【一空廠飛行機部作業係】安田組学徒もこの日は本廠へ行き、小型組立工場

の万力台の上にピラをひろげた。一日五午近く警戒警報解除後、連日の空襲は忘れた様に止み、仕事の指示もないまま一日が暮れた。」(『櫻水物語』)

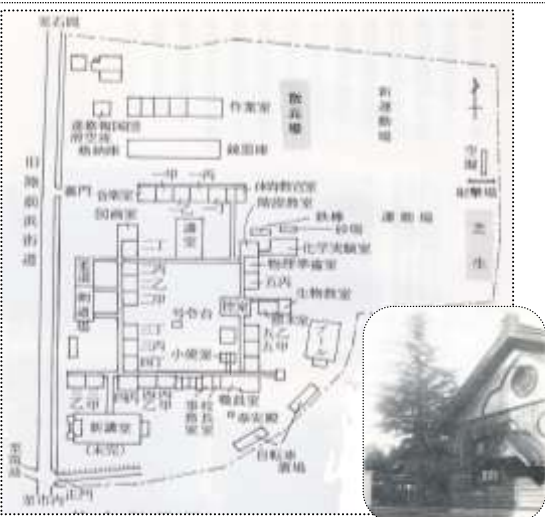
学徒たちは、作業もないのに通勤していましたが、8月18日に女子学徒と女子挺身隊員の一空廠退廠式が、慌ただしく挙行されました。更に8月20日には、男子学徒と女子工員の退廠式が行われ、一空廠に出動していた本校2年生以上の生徒たちも、式に臨みました。式後、土中生は第二工員宿舎前で物資の特配を受け、一空廠生活と別れを告げ、入寮者は実家へ戻りました。

翌21日には、全校生徒が登校。中庭に集合すると、学校から「2年生以上の動員生徒は、8月22日から31日まで休業。1年生は、馬鈴薯の植え付け準備、堆肥製造、除草、馬鈴薯植え付け、里芋堆肥。」との指示を受けました。あらゆる物資が不足し、とりわけ食糧不足が、一番深刻な問題でした。

9月1日には、全校生徒が登校し、始業式が行われました。5年生であるはずの中45回生が、4年修了で繰り上げ卒業していたために、4年生(中46・47回)が最上級生となつていました。

その日の学校の様子を、屋口正一は、「永い戦いと共に夏も終わった。ほぼ半歳振りに母校へ登校した時、校舎周辺には多数の防空壕が目立ち、建舞【上棟式】はしたものの資材不足で骨組みだけだった新講堂は、屋根と応急の外壁を張つて、学校工場となり万力台が並んでゐた。博物教室と物理教室との間の控室も又工場化し、木製架台の上に『天風』(空冷星形三〇〇馬力)発動機数台が置かれてゐた。教室に天井はなく【焼夷弾が引掛り延焼する虞があるとして、撤去されていた】、坐るに椅子足らず、学ぶに本なし、の状態であつた。戦災校の青空教室に比べれば恵まれてゐたが、教室の座席に坐りきれず生徒は廊下迄あふれた。」

1943(昭和18)年当時の校舎配置図(左)「控室」外観と中庭に現存する檜(左下)(いずれも「櫻水物語」より)



と記しています。(『続・桜水物語』)

疎開をして来た生徒たちで生徒数が急増していました。9月25日現在、定員1000名(1学年は4クラスで各50名に対して、全校生徒数は1405名(1年生から4年生まで)に達していました。止むなく、授業は、机・椅子作りから始まりました。生徒たちは各家庭から鋸・金鋸・鉋の類を持参し、加えて、全校生徒が釘を1人3本あて寄付する形で持ち寄り、桜川北岸にあった木工場へ連日通いました。1・2年生が材木を運び、野尻先生の指導で3年生が作り、出来た机と椅子とを4年生が、旧国道6号経由で真鍋坂を運び上げました。

何とか机・椅子は用意できましたが、教科書がありません。4月の進級時に1冊の教科書も買ってなかったのです(売ってなかった)。そこで、授業は取り敢えず、前学年の教科書を使つての学習から始まりました。動員や勤労奉仕で未修部分が残っていたのです。更に、敗戦で、内容に問題を抱えた教科書への、いわゆる「墨塗り」も行われました。漸く発行された戦後版教科書は、製本されたものではなく、分冊(表紙とも32頁)、印刷し放しの新聞2頁大を、綴じずに折り畳んだだけのものでした。しかも、それすら、当初は全員に行き渡る数はありません。

不十分なながら、机や教科書は用意されましたが、完全な授業再開とはなりません。その後の教務日誌に、

赤池(注)【付近の約1ヘクタールの松林跡の】開墾実施見聞。開墾開始につき生徒は万能・唐鍬・鍬・シャベル用意。

暴風のため開墾中止、授業を行う。
1・3年生午前中開墾、2・4年生午後開墾。

雨天のため授業。
などとなるように、食糧増産のための開墾作業が行われ、晴耕雨読の学校生活となっていました。

10月に入ると漸く授業が中心になってきました。生徒増は続いていました(定

員1000名に対し、1945年9月25日現在1405名、翌年5月20日1717名、同年9月9日1638名であった。)

この数値は、疎開転入生で生徒数が定員を遙かに超えたことに加え、敗戦により、満州や朝鮮などの外地から引き揚げて来た生徒の編入によるものでした。更に、復員学徒も転入してきました。在校生の歓呼の声に送られて、勇躍入校入隊した海軍兵学校・海軍経理学校・陸軍士官学校・陸軍幼年学校・各種少年兵学校に在籍していた生徒の外、海軍甲種予科練習生、乙種予科練習生、陸軍特別幹部候補生などが、「陸海軍諸学校在学者ノ編入学ニ関スル件(文部次官発地方長官宛通牒、1945年9月5日)」により、入学前の学歴と修了年次に応じて、相当学年に転入学してきたのです。この中には、本校出身者のみならず他校出身者も含まれ、共に机を並べることになりました(編入生徒数は、1943年95名、1944年136名、1945年521名、1946年178名、1947年47名であった)。そのため、服装は、陸海軍の軍服から隣組配給の陸軍兵用上衣や詰襟継ぎ接ぎの古い学生服まで、様々且つ雑多でした。帽子は、戦中には戦闘帽が制帽でしたが、終戦で出回った海軍略帽の錨章を外し桜水章に代えたものが普及していました。それは格好良かったのですが、物資が出回り始めると戦前型の学帽に代わっていききました。

11月2日に「陸軍現役将校配属令」が、5日に「陸軍現役将校配属施行規程」が、それぞれ廃止となり、これを以て学校教練に終止符が打たれ、生徒のゲートル姿も見られなくなりました。

授業は再開されましたが、小麦播種・甘藷掘り・製炭などの作業も行われ、11月6日からの1週間には、援農作業が実施されました。農家の生徒は自家作業を、非農家生徒は親戚その他軍人家族の援農作業を、農家作業のない生徒は学校での作業を行いました。また、9月から翌年1月までは、第一海軍航空廠での後始末の勤労奉仕も行われました。

1945年暮、電力事情が逼迫し、停電が一般家庭にも及びました。また、深刻な石炭不足と連合軍関係の優先運転とで、国鉄輸送は危機に瀕し、列車運行が大幅に削減されました。常磐線ダイヤも12月15日から5割減となり、列車通学生の定期券使用が1946年1月末まで停止されました。そのため、登校不可能な生徒は自宅学習となり、先生方は自転車で巡回出張し、生徒の様子を見て回りました。登校可能な生徒は、真冬の坂道・砂利道を自転車・ペダルを踏んで登校しました。

1946年3月25日、4年修了で卒業、進学・就職をする中学46回生159名の卒業式が挙行されました。1943年の「中等学校令(勅令第36号)」・「高等女学校規程」により、4年間とされていた中等学校の修業年限が、1946年2月23日の勅令第102号により、5年間に戻されていました。この年は、4年修了での卒業も認められていました。

5年生に進級した同級生(中47回144名)をはじめ、在校生たちはこの卒業式で、校歌第4番の「亀城八百」を「亀城千八百」と改めて歌い、46回生を送り出しました。

3月29日、1936(昭和11)年9月25日から校長を務めていた宗光太一郎が、「勉強せよ。責任を持って。着眼点を高くせよ。」との最後の言葉を残して、退職しました。

後年、宗光は、戦中から戦後に掛けての学校の状況を次のように記しています。

「戦時中は職員生徒も戦時色いっぱい塗りに潰されて、阿見にあつた海軍の航空廠に又は水戸線沿線の福原等に交代して徴用工として取られた。宿泊訓練や、教練等軍隊の真似事をやり、又学校では防空壕を作つて、空襲警報が発せられると夜の夜中でも学校へ駆け付け、壕の中で警報解除になるまで避難を続け、御真影を守護したものであります。片方、建築の建前だけを済ませたばかりの講堂は学校工場に当てられ、軍のお手伝をするやうになっていました。」

昭和20年8月15日、いよいよ終戦の詔勅が発せられると講堂に運ばれ備え付けられた機械類は取除かれて、理屈上平和になつたとは申すものの、何からどんな風に始末をつけてよいか全く手のつけ様のない有様で困りました。そのうち進駐軍が到来してその指図に従わねばならぬとか、進駐軍は日本軍と異り、情に冷たいとか、残酷ださうだ等噂が飛来したりして、つまらぬ心配をしたものでした。さういう混乱状態の中で、教育は大切に続けられていつた次第でした。「(終戦当時の学校の状況(『進修同窓会報』第5号(1966)昭和41年6月発行)」)

(注)赤池(木田余東池)

1841(天保12)年に、第10代土浦藩主土屋寅直(1820・1895)の命を受け、幕末の農政学者長嶋尉信(やすのぶ)が、農村振興策の一環として、殿里・真鍋・木田余3ヶ村の入会池として造つたもの。現在の茨城県南自動車学校付近から木田余宝積寺近辺までの地に、北から一番上が殿里池、次が西真鍋池、東真鍋池、その下に木田余の西池と東池、と5つの池が段々に連なり、周辺は松林(終戦直後には土中生が開墾作業に当たった)となっていた。池の水は、滝のように下の田んぼに落ち、木田余宝積寺の脇を流れて、殿里・真鍋・木田余の農業用水として利用されていた。現在は、一番下の木田余東池を残すのみとなっている。



海軍略帽(右)と櫻水章(下)



新講堂(1947 昭和22)年落成(右)
新講堂での創立60周年記念式典1957年11月2日(上)



土浦中学から土浦一高へ2 ～新講堂建設～

終戦以来、本校でも、軍国主義・超国家主義の排除による混乱が続きましたが、1946(昭和21)年4月には講堂建設促進委員会が、5月には工事が、再開されました。今号でも、戦後の土浦中学・土浦一高の状況を「教務日誌」、「進修百年」、屋口正一(中48・高1回)著『櫻水物語 戦中派の中學時代』・『続・桜水物語 終戦直後の中学生生活』・『櫻水物語(三) 土浦一高元年』などから辿ってみます。

引用文中の【 】内は筆者による注記です。

軍国主義的教育内容の排除

1946年4月5日、戦中から戦後に掛けて、校長として難局を切り抜けてきた宗光李太郎の後任として、県視学官であった今宮千勝が赴任しました。

これより先、1945年10月、GHQは戦前の教育体制を解体し、軍国主義・超国家主義の排除と教育の民主化を進める為、「教育に関する四大指令^{注1)}」を発しました。この指令に基づく文部省の指示によって、教科書の「墨塗り」を皮切りに、軍国主義的な教科内容の排除が行われ、本県でも、1946年7月以降、本格的に実施されました。本校での動きを当時の教務日誌から拾ってみると、

7月9日 放課後職員会議、軍国主義超国家主義処理二関スル件

7月10日

朝礼アリ、軍国主義物件処理挙手敬礼ノ廃止……等、本日授業ナシ、全校ヲ挙ゲテ軍国主義物件ノ処理ヲナス、正午一先ズ【ひとまず】終了、五年ノミ午後始末ヲナス。

7月12日

午前十時ヨリ【土浦高等】女学校職員来校、処理物件検閲、午後一時ヨリ本校職員、女学校検閲、終ツテ懇談、四時終了

7月13日

軍国主義並ニ極端ナル国家主義的物件処理ニ関スル県ヘノ報告書作成(十五日、地方事務所ニ提出ノ筈)

といった状況でした。

この間、10日から16日の間に、5日を要して、奉安殿が破却されました。納められていた御真影と教育勅語とは、県に奉還し、明治天皇の御衣(純白のフロックコート)は、八坂神社に奉遷されました。「佐久良東雄の歌碑^{注2)}」を埋め、防空壕の破壊と埋め戻しも行われました。備品などの整理に当たっても、進駐軍に見つけられては大変だ、というような凶書

や「教練」で使用した教具・兵器などの、国家的色彩の濃いものとか皇室に係るものなどは、廃棄処分しました。が、宗光が後年述べているように、現在に至って考えてみると、随分と馬鹿馬鹿しいと思われることもあったようです。こうした時期を振り返って、元本校教諭永山正(地歴科)は、

「……こうして我国は建国以来初めて米英の占領下に入り、水戸に茨城軍政部が置かれ、政治、教育全てに絶対的権威を以て【GHQは】臨みました。土浦にもカラハン大尉ら百二十名が進駐して来ました。さてこれより先、県の指示により、学校図書のうち、軍隊・皇室、日本歴史、地理、修身に関する図書を、中庭に大きな穴を掘り、三日に亘って全部焼きました。燃えない百科事典などの神社・皇室・軍人関係の所は墨で塗り、抹殺しました。軍事教練関係の鉄砲・剣なども埋め、土浦【高等】女学校と相互に査察し合って、何か残っている所は無いかを調べました。とにかく、秦の始皇帝と同じようなこと【焚書坑儒】をしたわけです。『学校の近くの先生は、家まで検査されるかもしれないので、できるだけ処分しておいた方がよい。』と言われ、私は多くの本をカマスに入れて焼きました。現在ある本の殆どは、戦後揃えたものです。」

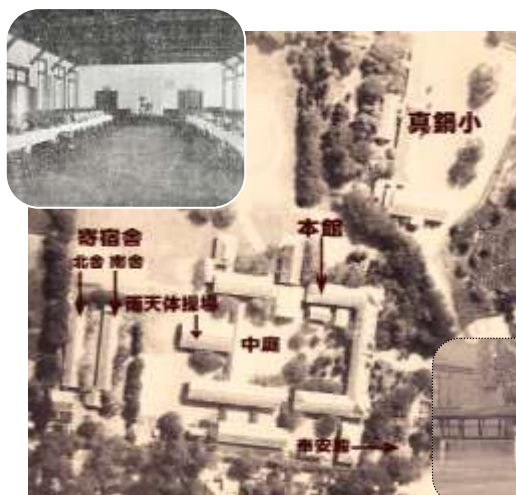
新講堂建設

戦前、入学式や卒業式などの学校行事は、1905(明治38)年に旧本館と同時に竣工した雨天体操場(現在の本館中央付近)にあり、床面積はバスケットボールコート1面が確保できる程度のもので、演壇などは無かった。)で行われていました。

雨天体操場の四方の壁と出入口との上部には黒縁額に入った校訓(1909明治42)年10月30日制定)が掲げられていました。北側の正面右に「至誠」、左に「自重」、

西側に「愛敬」、南に「剛勇」、東に「勤儉」。いずれも、力強い筆太の書で、旧制第一高等学校現東京大学教養学部教授・文学博士の鹽谷温(しおのやおん)先生の筆によるものでした。

1931(昭和6)年頃の本校全景(中)。中庭から見た雨天体操場(下)。雨天体操場での進修同窓会総会(1937年8月21日)(左)。



土浦中学では、1940(昭和15)年度からの1学級増が認められ、44年度の定員は1000名となるため、教室の増設が進められていました。加えて、手狭になってきた雨天体操場に代わる、諸設備を揃えた新講堂の建設が計画されました。1941年1月末の同窓会校内幹事会、2月15日の同窓会幹事会で、講堂建設基金を同窓会が主体となって募ることとなり、講堂200坪、付属施設67坪の新講堂建設に向かつて、寄付金集めが始められました。工事は中澤組の請負で施工されることになり、その敷地は、奉安殿(1928(昭和3)年、昭和天皇即位大札を記念して建設された。)のある一面に、と決まりました。募金は順調に進み、1943年7月18日に地鎮祭が行われることになりました。そ

の為、御真影と教育勅語と明治天皇の御衣とを真鍋国民学校の奉安殿に奉遷した上で、奉安殿を東へ、職員室玄関に向かつて右前方の樹木の中へ移すことになりました。腹掛けに地下足袋姿の仕事師が、土台から外された奉安殿をコロに乗せ、ワイヤーを掛けて、手動ウインチの丸太棒を4、5人掛かりでギンギン回して引いて行きました。少しずつ前進させ、所定の位置まで達するのに数日を要しました。

1945年1月25日に、新講堂の上棟式が漸く挙行されましたが、上棟はしたものの、極度の物資不足で内装工事に取掛かることはできませんでした。

文部省が1944年5月16日に出した、学校工場の実施を命ずる通達（学校工場化実施要綱）により、工場の機械を学校に移し、生徒が作業に従事することになりました。土浦中学では、建設の中断を余儀なくされていた講堂を学校工場に充てることになり、1945年6月26日から、工作兵が講堂脇の小屋及び2年甲組の教室に宿泊して、そのための作業に取り掛かりました。骨組みだけだった新講堂は、屋根を葺き急急の外壁を張って、学校工場となり、広い土間には万力台が幾つも据え付けられ、工具や部品も運び込まれました。7月には、6月18日に第一海軍航空隊に入廠していた2年生の一部が、学校に戻され、学校工場で飛行機部品の製作に従事したようです。

終戦後、新講堂は学校工場ではなくなりましたが、骨組みに屋根と外壁だけという状態が依然として続いています。

1946年4月18日、講堂建設促進委員会が再開され、5月5日の常陽銀行東支店楼上での会議で、建設委員長に今宮、促進委員長に宗光を選び、目的達成が期されました。5月8日には中澤組より足場資材が搬入され、工事が再開されました。当初の計画では、新講堂に加えて卒業生（同窓生）会館も建設する予定でしたが、戦後の物資不足や極度のインフレの為

に、再開された工事は思うように進まず、会館建設計画は、断念せざるを得ませんでした。当時の苦勞を促進委員長であった宗光は、『進修同窓会報』第5号（昭和41年6月発行）に次のように記しています。

「御真影と教育勅語とは県に奉還し、奉安殿も必要が無くなり、又私の後任、今宮先生の時に講堂再建の問題が起き、その時私は退職して遊んでいましたので、講堂再建の促進委員長として進修同窓会より依頼を受けて、現存の講堂を仕上げるのにお手伝いをした次第です。たゞ物価が高くなりつゞけ、講堂と共に卒業生会館も建設する筈でありましたが、この計画は不可能となり、最初の予算の二倍以上も掛けて、講堂だけを一ケ年余を費して完成した次第でした。土浦市の中澤組其他の方が工事を請負われ、熱心に着実に諸工事が進められ、皆に喜ばれた次第です。後に至つて安く出来たものだと思われる程に、貨幣の価値の変動に驚くばかりでした。以上、記憶を辿りつつ筆を執つてみました。

奉安殿の後始末、講堂建築及び卒業生会館の建設工事、運動場の整備等、一つ一つ手筈をつけて仕上げねばならぬ状態でしたが、物価の変動、貨幣価値の変動、甚だしく、学校の運営を普通の状態に戻してその振興を図ることが如何に困難であつたか、御想像にお任せしたいと思います。

物資不足や猛烈なインフレのため、建設は困難を窮めました。宗光はじめ多くの関係者の熱意と努力とによって、工事は進められました。

『いはらき新聞』は、1947年1月24日付の紙面で、工事経過を

「完成の暁は断然果下一を誇る県立土浦中学の大講堂も資材の狂騰と人手難、更に工賃の値上がりから昨秋以来頓挫を来し、学校当局は勿論、工事促進委員も請負人たる中澤組との間に再三折衝中であつたが、きのう午後一時県建設課

係官立会の上、今宮校長、宗光工事推進委員長、卒業生並父兄会代表と中澤組との間に十四万円の工事費を追加増額し、年度末の三月末日までに必ず完成することの再契約をしたので近く父兄会臨時総会を招集して不足工費二十三万円の捻出に協賛することになった。」と報じています。

委員会が協議を重ね、父兄会総会でも生徒1口100円の募金を可決するなどしました。委員は資金の工面に奔走しました。その結果、3月末日までには完成に漕ぎ着け、6月4日に引渡式が行われました。

土浦中学創立50周年及び新講堂落成記念式典は、11月2日に100名を集めて挙行されました。卒業生会館は実現しませんでした。敗戦を乗り越えて、同窓生を含む関係者の悲願が結実した日でした。3日には記念運動会を開催し、5日の午前には日本交響楽団の団員数名によるクラリネットの演奏やソプラノ独唱が行われ、午後1時半からは文学座による『我が町』が上演され、全校を挙げての慶祝となりました。

進修記念館・進修学習館建設

新講堂が竣工すると、入学式や卒業式は、雨天体操場に代わつて新講堂で行われるようになりました（雨天体操場は、体育の授業や部活動の活動場所として使われてきたが、創立60周年記念事業による図書館建設の為、1959（昭和34）年10月に取り壊された）。また、新講堂は、体育の授業では勿論、「文化祭」の会場として、バスケットボール部や体操部などの運動部の練習場や試合会場として、演劇部の稽古場、公演会場として、使用されてきました。

1960年代前半には、生徒数の漸増に伴い、その狭隘さが問題となつてきた上に、戦中戦後の物資不足の中で建設された為、か、老朽化が早く、修理を繰り返して、辛うじて使えている有様でした。そこで、

創立70周年記念事業の一環として、講堂兼体育館の建設が企画され、1968（昭和43）年2月27日に竣工しました。この新体育館（前体育館。現在のテニスコート付近にあり、床面積1,848㎡、鉄骨鉄筋2階建、全長59m、幅36m）の建設により、新講堂は旧講堂或いは旧体（旧体育館）の意と呼ばれるようになり、普段は、部活動や体育の授業で、「高祭」では、デイベートコンテストや喉自慢などの第三会場として、使われていました。特に第三会場の熱狂ぶりには、「魔の第三会場」と呼ばれ、語り草となっています。

1991（平成3）年1月、創立100周年記念事業の一環として、旧講堂（旧体育館）の地に同窓会館兼アリーナ及び多目的学習館の建設が決議されました。記念事業は順調に進み、1996（平成8）年7月に多目的学習館（進修学習館）と命名が、1997年3月に同窓会館兼アリーナ（進修記念館）と命名が、それぞれ竣工し、卒業生会館建設という、同窓生たちの願いが、50年越しに実現しました。

① 教育に関する四大指令

①「日本教育制度ニ対スル管理政策」
教育内容、教職員、教科目、教材の検討・改訂についての包括的な指示を出し、文部省にGHQとの連絡機関の設置と報告義務とを課した。

②「教員及教育関係官ノ調査、除外、認可ニ関スル件」
軍国主義的、国家主義思想を持つ者の認可からの排除についての具体的な指示。所謂「教職追放の実施」。

③「国家神道、神社神道ニ対スル政府ノ保証、支援、保全、監督並ニ弘布ノ廃止ニ関スル件」
信教の自由の確保と極端な国家主義、軍国主義的思想の基盤をなしたとされる国家神道の解体により、国家と宗教とを分離し、政治的目的による宗教の利用を禁じた。

④「修身、日本歴史及地理停止ニ関スル件」
軍国主義的及び極端な国家主義的思想の排除を教育内容において徹底しようとするもの。修身・日本歴史・地理の授業停止とそれらの教科書、教師用参考書の回収とを命じた。

佐久良東雄の歌碑
「すめらぎにつかへつれとわれをうみし
わがたらちねぞ、たふとかりける」



校訓「自主・協同・責任」徳富蘇峰書
(土浦一高発足後に揮毫されたもの)(上)
終戦直後に掲げられた英文の門標(下)

土浦中学から土浦一高へ3 ～新校訓 「自主・協同・責任」～
1946(昭和21)年度にも、食糧不足や猛烈なインフレに悩まされましたが、土浦中学では、学校行事を復活させるなどして、快活な日々を取り戻していき、11月3日には、日本国憲法の公布に合わせて、新校訓を制定しました。
引用文中の【 】内は筆者による注記です。

土浦中学最後の入学生

1946年4月7日から入学試験が始まり、国語・数学の学科試験が復活、面接試験(受験生5名、面接官3名)と合わせて、9日まで行われました。志願者719名の中から305名が合格し、入学式は18日に雨天体操場で挙行され、その結果、第1学年から第5学年(1942年度入学生)までの全学年が揃いました(5月20日現在の生徒数17名)。

翌1947年4月1日には、学制改革(6・3制、新制小中学校の発足)が行われ、旧制中学校の生徒募集は停止されました。そのため、1946年度が土浦中学への最後の入学となり、この学年(併設中2回・高4回)は、1950年4月に新制中学からの入学生(高5回)を迎えるまで、後輩を持たない学年となりました。

6・3制教育の開始とともに、学校教育法施行規則(1947年5月23日、文部省令第11号)により、学校教育法による中学校(新制中学校)が、旧制中等学校内に併設されました。旧制中等学校に在籍する学齢生徒(義務教育を受けることが適切とされる年齢の生徒)の新制高校への入学のための措置として、1947年4月からの2年間に限り、中等学校に併設中学校が設けられたのです。旧制中学校の1・2年修了者を新制中学校の2・3年生として収容したもので、本校でも、1945年度入学生が併設中3年生と、1946年度生が2年生とされました。暫定的・経過的措施で設置された併設中学校は、新たな生徒を募集せず、在校生は2・3年生のみの中学校でした(1年生に相当する生徒は、新制中学校に入学した)。

真鍋台の校舎には、茨城県立土浦中学校の4・5年生と茨城県立土浦中学校併設中学校の2・3年生とが併存することになりましたが、1年生がいらないだけで、全員が旧制土浦中学校への入学生であり、併設中2・3年生も、「自分たちは土浦中学の2・3年生だ!」との思いを強く持っていました。

新校訓制定

今宮新校長を迎えスタートした1946年度には、相変わらずの物資不足に苦しめられていましたが、学校生活本来の明るさを少しずつ取り戻していきました。4月27日に全校遠足を、7月19日には県南中学野球大会(土中会場)を、秋には秋季大運動会・水泳大会と日本体育専門学校生(1946年に日本体育専門学校が土浦海軍航空隊(予科練跡地)に移転し、1949年に日本体育大学となり、1951年に世田谷区深沢へ全面復帰した。)による演技披露器械体操・徒手体操とを行うなどして、学校行事を復活させ、部活動も活発にしていきました。そして、11月3日の日本国憲法公布に合わせて、「自主・協同・責任」の土浦中学の新校訓を制定したのです。この新校訓の制定について、第8代校長今宮千勝(1946年〜1947年在職)は、後年、「土浦一高進修新聞第27号」(1957(昭和32)年刊)に『校訓の生まれるまで』と題して、次のように記しています。

「終戦直後は、極度な混迷が我が教育界にも襲って来て、教師は教育の指標を失い、生徒は修業の拠り所を失って、空白の巷に彷徨した。勿論、世相は混沌として、目を覆うような状態が続いた。今までの教育上の伝統は、跡形もなく毀たれ【コボたれ。こわされる。破壊される。】

ていき、「国家的なもの、軍事的なもの、一切を焼却しろ。」との当局の厳命で、辞書の中から、「軍」とか「戦」とかの文字を拾っては、墨で塗り潰す始末であり、国家的な文献を見付け出しては、毎日のように校庭の隅で焼き捨てた。後に得難いような歴史的な文献・参考書は、煙滅に忍びないので、密かに民家の倉を借りて保管し、厄を免れた。大凡【タイハン・タイボン。おおよそ。あらまし。】、こうした姿が当時の有様であった。

こうした時であり、また文部省からして、明確な教育上の根本精神も示されず、況して、新時代教育の具体的諸内容に至っては、五里霧中の実情。表向き平静を装ってはいても、教師も生徒も、思想の空洞の陰に潜む不安を覆うべくもなかった。

由来、青少年時代ほど、理想を希求し輝かしい憧憬をもつ時代はなく、青少年は、これによって生き、これを仰いで、精進努力する時代なのである。明るく強い人生の指標の灯が、若い者の胸に消える時に、青年の前途は暗く、方向は失われる。当時の職員が、いたく憂慮したのはこの点で、昭和二十一年四月の始業の当初から、新しい時代に相応しい、金字塔としての新校訓を打ち建てたい、というのが当時の本校の中心課題と成り、わたくしは、このために心胆を砕いた。

苟も、校訓たる以上、慎重に慎重を期さねばならぬ。校訓の一般的具備条件としては、学校教育の指標であり、また、生徒の人生錬磨の指針である以上、教育上の理念に基づき、倫理学上の理念にも照らして、永遠の真理性を持つべきものであることを第一とせねばならぬ。当に民主主義国家としての国是に即応して、

教育訓としても、人生訓としても、その性格が明らかに現れるべきである。なお、青少年の真理に照応し、澁刺として伸び行く若さを培うべきものでありたい。こうした原則的な条件の上に、不拔の信条を打ち出さねばならぬ。

五月一日、職員会議を開き、基本的考えによる校訓制定の方針を示し、わたしがかねがね懐いていた具体的内容についての所信を披瀝して、職員に諮り、慎重討議すべき資料を示し、その研究に委ねたのである。その後直ちに校訓制定委員会を組織し、度々委員間の討議を重ね、推敲を積んだ。

わたくしは、当時こんな心構えで校訓制定に当った。大方の校訓は、ともすると校長一個の志向から出て、或は某古典の中の名文句などを抽出して、一方的に作られがちであるが、新しい教育における校訓は、そうした経緯で作られるべきでなく、職員全体が共に和して考え、生徒もまた、我が血・我が肉として関心を持ち、校長も職員も生徒も、三者一体と成って生み出されるべきだ、と固く信じていた。

そこで一方、職員に諮ると共に、生徒とも語り合った。特に卒業年度【中47回】の三つの組に対しては、毎週各々一時間宛ての授業を「研修」という名の下に当初から受け持った。それは五年のみでなく、欠課の生じた組には、一年だろうが四年だろうが満遍なく、随時に埋め合わせの授業に出た。勿論、教科には関係なく、テキストもなく、世間話に交えた人生訓を語り、また生徒からも聞いた。さしずめ『論語』の一節でも引用するところであつたらうが、当時はそれも成らず、愛読していた民主主義の書や若い頃読

んだ青年向けの英語の修養書から、新時代に即したものを取り出し、学年に応じて、原文などを示しては話した。そして、帰する所の話題は、青年の自主独立の精神を尊び、社会生活上の協同精神を讃え、責任の持てる人間に成ること、責任を負わされ得る人間に成ること、などを繰り返して語った。そして、こうした志の向きや気運は、職員にも生徒の間にも自ら醸されてきた。なお、校訓の形式的条件として頭に置いたのは、文字は平凡で直読直解され、他の説明を要せず、自己の解釈力で深淺如何様にも解されるものであり、箇条は多くなく簡潔に、そして長く記憶され、一生涯を通じて、時あれば脳裡に呼び、指針と成るような、しかも、夫々は関連を持つて、木に竹のようなモザイクの羅列に成らず、一体と成つて人格を培うものでありたい、との願ひであつた。

『自主』

『協同』

『責任』

あえてこの際、自明なこの三綱領について説明することは、蛇足であろうか。日々の教育上、これがどんなに活用され具現されるかは、これを用いるその人であり、生徒が日夜の修業に如何に活かし卒業後の長い人生の間、各種の境涯において、これを羅針盤として、如何に方向を求め、灯台として、如何に光明を探るかは、これ又その人の器にある。

『自主』(自由・自律)は、

そもそも人間存在の基本性格であり、ここに生きて真の人間があり、これを失う時、人間の本质と道徳の根基が破れる。

しかも、これを憧憬しこれを確立する絶好の時機は、青少年時代である。

『協同』は、

今後の民主的社会的基調で、従来の我が国民の徳性に乏しかった点である。前者の『自主』が、個人道徳の根基となるものとすれば、後者の『協同』は、社会道徳の紐帯【ジュウウタイ・チュウウタイ。ひもとおび。転じて、いくつかのものを結びつける大切なもの。】でもある。両綱領を並び合わせて、個人的にも社会的にも、不動の指標が打ち建ち得る、と信じる。

『責任』は、

主体的に生きる人生の不可欠の信条であり、『自主』の美を成せるも『責任』であり、『協同』の実を結ばせるのもまたこれである。更に、敢然として男子の本懐とするところの美德も、これである。しかも、現時、ともすると若い世代に失われがちなものとして、念々護持すべきものが、またこれである。

こう見る時、この三者が一丸となつて、人格の中核に育まれるならば、新教育の精神に則る学窓生活はいままでもなく、これが一体と成つて人生の行路を照らせば、どんな境遇職域にあつても、確固不磨の人生訓と成り、凡百の諸徳目これに従つて生まれる、と解されるではなからうか。

委員会の討議の結果も、これに帰一し更に、職員会議にも諮り、なお、生徒の世論調査の結果も、勢い符を合わせるように締結して、これを校訓にしたい、という希求となり、こうした経過で始めて、総意がここに結集したのである。

十一月三日は、「文化の日」であり、この吉日をもつて校訓制定を記念しよう

として、改めて生徒にもこれを公表し、生徒代表が、新しい校訓を体して校風の刷新をする旨の厳かな宣誓を為し、式後、講堂前に数株の公孫樹【イチヨウ。銀杏・鴨脚】等の記念植樹をして、いささか百年の計を成すの意を象徴した。



1955(昭和30)年の航空写真。
講堂の東側に植えられた記念樹が、まだ小さかったのが分かる。

自主、独立に徹し、
協同、大和を成し、
責任、本務を果す。

校訓の真精神を生かし、珠を磨いて光あらしめるものは、我が土浦第一高等学校に学び、この学窓を出た者の双肩にあるものと思う。どうか、往時の教職員生徒が、混迷の間から心胆を砕いて生み成した校訓の精神を存分に生かし、幸福にして充実した有意義な人生を生き抜かれますよう、念じつつ筆を擱く。」

※この校訓は、1948年4月1日に発足した茨城県立土浦第一高等学校に継承され、今日に至っている。



旧制土浦中學校の卒業證書 (昭和23年3月5日) (右)
新制土浦一高の卒業證書 (昭和24年3月5日) (左)
(いずれも、中48・高1回大貫和邦所蔵)

土浦中学から土浦一高へ4 ～土浦一高発足～

1948(昭和23)年4月1日、「茨城県立土浦中学校」が51年の歴史を閉じ、「茨城県立土浦第一高等学校」が発足しました。新制高校では、最早、旧制中学校でもなく、旧制高校でもない、新しい学校づくりの模索が始まりました。引用文中の【 】内は筆者による注記です。

新制小中学校発足

1947年3月5日、1942年度入学生14名は、5年修了で卒業し(中47回。同じく1942年度の入学生であった159名は、4年修了で前年に中46回生として卒業した。)、就職するか旧制の上級学校(旧制高等学校、大学予科、大学専門部、高等師範学校、旧制専門学校)に進学するかしました。

3月31日、教育基本法と学校教育法とが公布され(国民学校令・中等学校令は廃止された。)、前者はその日に、後者は翌4月1日に施行され、新制小中学校が発足しました。6・3制の実施により、旧制中学校の生徒募集は停止され、学校教育法による中学校(新制中学校)が、旧制中等学校内に併設されました。これは、旧制中等学校に在籍する学齢生徒(義務教育を受けることが適切とされる年齢の生徒)の新制高校への入学のための措置として、1947年4月からの2年間、中等学校に設けられたもので、旧制中学校1・2年修了者を新制中学校(併設中学校)の2・3年生として収容しました。併設中学校は、あくまで暫定的、経過的な措置として設置されたため、新たな生徒募集を行わない、2・3年生のみの中学校とした(1年生に相当する生徒は、別に設けられた新制中学校へ入学した。)

本校でも、1945年度入学生が併設中学校の3年生と、1946年度生が2年生とされました。旧制中学校の3・4年修了者は、そのまま旧制中学校4・5年生として在籍していて、真鍋台の校舎には、茨城県立土浦中学校と茨城県立土浦中学校併設中学校とが併存することになりました。旧制の土浦中学校は依然として存続していて、校舎、教師、生徒も同じであったために、併設中学校の2・3年とされた生徒たちは、「自分たちも土浦

中学の2・3年生である。」との意識で生活していました。

土浦一高発足

翌1948年1月24日、本校では、新制高校準備委員を選ぶ選挙が行われ、永山正清水繁次郎、小沢永次郎、福田仁、石崎正雄、飯島徹男、林卯一郎の7名の教諭が選出され、土浦一高設立の準備が始まりました。

3月5日には、1943年度入学生314名(中48回)の卒業式が(進路は、家業を継ぐことを含む就職、旧制高等学校等の上級学校への進学、新制高等学校進学とに分かれた。)、20日には併設中学校3年生444名(1945年度入学生・併設中1回)の卒業式が行われました(進路は、就職と新制高等学校への進学とに分かれた。)。29日には、(土浦一高)通信教育部生の入学者選考も行われ、男子100名、女子23名が入学し、第1回生となりました。

4月1日、学制改革により、旧制中学校・高等女学校・農学校・工業学校・商業学校が廃止され、新制高等学校(現高等学校)が発足しました(6・3・3制)。旧制中等学校卒業生の希望者を新制高校3年生として、旧制中等学校4年修了者を新制高校2年生として編入し(編入を希望しない者には、5年修了で旧制中等学校の卒業が認められた。)、併設中学校の卒業生(1945年度旧制中等学校入学生)が、新制高校1年生となりました。併設中学校は新制高等学校にも併置されていて、1946年度に旧制中等学校へ最後に入学した3年生を残すのみとなりました。

部普通科は7クラス400名、通信教育部100名の学校となりました。正門(現旧正門)の門標は、「茨城県立土浦第一高等学校」と変わり、校章は、「高」の字に桜水をあしらった、土浦中学時代より小ぶりのものに決まりました。4月15日には、新制高校1年生の入学式が講堂で挙行されました。

土浦一高の3年生は、3月5日に卒業した中48回生の希望者が殆どで、それに、中44回と47回の少数の旧制中学校既卒者(翌年の新制大学の入試を受けるには、新制高校卒の資格が必要であった。)&2桁の他校からの編入者としていた。そのため、この年次だけは、「旧制」中学校の卒業証書(大部分が中48回)と「新制」高校第1回の卒業証書とを持っています。

他校からの編入者の中で、岡山県立第二岡山中学校(現岡山県立岡山操山中学校・高等学校)から転入してきた高1回高木尚道は、中48・高1回屋口正一著『櫻水物語(三)土浦一高元年』の中に、「思い出」と題して、土浦一高転入に至る経緯を次のように記しています。

「昭和二十三年三月旧制第二岡山中学校を卒業し新制高等学校発足と共に土浦第一高等学校に編入され一年間の高校生活後茨城大学に幸にも入学しました。一年間のみの高校生活でしかも大学受験に迫られ今色々と振り返ってみて残念ながら一高での思い出が特にありません。

私は昭和十九年十月、逗子開成中学校【現逗子開成中学校・高等学校】二年時生徒動員で日立製作所戸塚工場で働き、二十年三月鎌倉から父母の故郷である岡山へ転居(父は横須賀に残る。)。市内の叔母の家から第二岡山中学校三年に転入し、岡山市内への米軍の空襲で学校及市内丸焼の経験をし、八月十五日の終戦を迎え、昭和二十一年家族は父が復員

後茨城県稲敷郡阿見町の旧霞ヶ浦飛行場入口にアメ工場新設勤務した関係で移りましたが、私は中学卒業迄岡山に住し、昭和二十三年三月両親の下に帰り、学制改革による土浦一高三年に編入されたわけです。この様な生活環境の変化で土浦一高での一年間の中で唯一の思い出として今も思い出されるのは教科の中で一番好きであった数学が第二岡山中学校では卒業迄に微分積分確率迄を終えておりましたが、土浦一高では微分が始まったばかりであったので非常に楽であった思い出があります。又大学受験についても早稲田大学理工学部に入りたかったが学制改革時の初年度で理工学部は募集しないとの事で茨城大学受験となったという昭和二十三年・四年頃は終戦の混乱いまだ続いて居り学制改革と重なったという世の中の変化が大きかった為、その思い出の方があまりにも強すぎる様に思います。」

土浦一高の2年生は、土浦中学校の1944年度の入学生で、4年を修了し、土浦一高への移行を希望した者(高2回)です。希望しない者には、経過措置として、5年修了での土浦中学校の卒業が認められました(中49回)。

1年生は、土浦中学校の1945年度入学生で、併設中学校3年を卒業し、土浦一高1年に編入された者(高3回)で、土浦一高への切り替え編入を希望しない者は、3年を卒業し、就職或いは他の新制高校への進学を選択しました(併設中1回)。

併設中学校は、3年に進級した1946年度入学生だけになりました。彼らは、後輩のいないことを非常に口惜しく残念に思っていた。が、土浦一高生となつた彼らの先輩も、同じ土浦中学校への入学生であり、高校と中学校との間に隔たりはありませんでした。ただ、併設中生には出場資格がないために、高校の部

活動には参加できず、彼らは併設中生だけでチームを作り、他の併設中或いは新制中のチームと練習試合をして鬱憤を晴らしていました(高4回・本校第24代校長大曾根宏亮たちは軟式野球チームを作り、土浦二高併設中のチームと試合をしている。これが軟式野球部の始まりとなつた)。

土浦一高3年生となつた高1回杉山(旧姓・宮本)弘は、当時の学校生活を前掲書『櫻水物語(三)土浦一高元年』で、「充実の一年」と題して、次のように述べています。

「新制高校へ進んだのは、特に目的を持って進んだのではなく、進学も就職も駄目で仕方なくもう一年行こうという風だったと思います。

高校三年に編入になることについては、中学の延長のような気持ちでしたが、今まで一緒に通学していた友達が卒業してそれぞれの道に進んで行くのを見てみると、自分が独り取り残されて行くようで、気持ちも落ち着かず勉強には熱中できませんでした。

当時進学した友人達は、リーゼントという髪型をして、角帽に制服姿という格好で土浦の街を歩いているのに出会い本当に大人っぽく見え、羨ましかったものです。

二期頃になると、進学組と就職組に分けられ、私は就職組になつたと思えます。

この就職組が、就職の準備ということ、ある日市内の銀行へ見学に連れて行かれたとき、五年で卒業して銀行に就職していた某君が、背広姿で仕事をしているのを見て立派なものだと感心しておりました。

今でも印象に残っているのは、英語の小沢先生のことです。昭和二十二年五月に新憲法が公布されておき、先生は、新憲法の英文版テキ

ストを使い、この授業では、単に英語の勉強ということばかりではなく、新憲法が目ざす平和への理想というようなどについて熱心に講義をされ、感銘を受けたものでした。……(後略)……」

また、高1回根本隆は、同じ前掲書の中で、「高三時代」として、戦後の混乱期に苦悩する青年の心情を次のように述懐しています。

「土浦中学の入学試験は難しかったが、入学したくて勉強に努力した。新制高校は受験という緊張もなくそのまま進級した。

世の中は戦後の混乱期で、何もかも整わず全てに統一もなく制服もなかった。中学時代のカーキ色の学生服や黒の詰襟の服を着用したりで、とにかくある物で凌ぐしかなかった。

終戦を境にアメリカ当局によつて、それまでの全体主義(国家主義教育から民主主義教育に俄に転換された。教科書は墨で黒く塗り潰されて、今までの教育は全て悪とされ民主主義が押し進められた。自由” “個人主義” “民主主義”という言葉の氾濫の中で何か特別な解放感を抱いたが「民主主義」という言葉の概念も全く理解できなかつた。歴史や道徳の価値観も逆転しどこに基準を置いたらよいか迷つた。

民主主義社会となつては大学も出なければ一人前にはなれないと考えて志望したが大学受験といつても今のように入校もなく特別な受験指導もなく何をどう勉強したらよいか考えあぐねた。結局高校課程の勉強で東京に出て心細い思いで大学入試に臨んだ。……(後略)……」

定時制夜間部

本校定時制は、新制高等学校の発足と同じ1948年4月1日に、「茨城県立土浦第

一高等学校に夜間制高校を併置する」という形で開設されました。5月1日、第1学年普通科100名を募集し、志願者78名中68名(うち7名は女子)が合格、5月10日に入学式が挙行され、64名が入学し、初の女子生徒が誕生しました。

定1回助川弘は、

「清水繁次郎先生と本間七郎先生が定時制専任で、他は全日制から熱心な先生方が兼任されました。残念なことに当時はまだ電灯設備が設置されておらず、夏の陽の高いうちでも五時から七時頃までの授業で、正課の九時十分までは勉強したくても暗くて出来ませんでした。九月末【28日】にやっと電気がついて授業が出来るようになりましたが、電力事情が悪くしばしば停電に見舞われました。そうなると思えば黒板の字が見えませんが、暗い教室にろうそくを灯して先生のお話だけを伺いました。」「(『進修百年』所収「定時制の創立」と当時の学びを振り返っています。



定時制第1回生の茶話会(昭和24年12月)
最前列中央に4名の教諭が並ぶ。左から、林卯一郎、長南俊雄、土井麟助、本間七郎。
『進修百年』より



『進修』(上段右から復刊第1号、第3号)
『星座』(下段右から第1号、第3号)

土浦中学から土浦一高へ5 ～新生土浦一高～

旧制土浦中学校が創立50周年を祝った翌年の1948(昭和23)年4月、茨城県立土浦第一高等学校が発足しました。新たな高校づくりは、学校当局は勿論、県や文部省すらも全く手探りの状態で始まりました。

引用文中の【 】内は筆者による注記です。

無から有への挑戦

1948年度、新制高校が発足した一方で、旧制水戸高等学校をはじめとして、全国には官公私立39(文部科学省発行の『学制百年史資料編』による。)の旧制高等学校が、依然として存在していました。新制高校は、最早、旧制中学校ではなく、さればと言って旧制高校でもなく、その新しい学校像をゼロから創造していくほかはありませんでした。

本校では、2学期制を導入しました。月曜日から金曜日まで毎日6時限授業です。その中で、ドイツ語の授業も行われました。新制中学校との差異を強調するためだったと思われませんが、そのドイツ語の授業について、中48・高1回屋口正一は、その著『櫻水物語(二)土浦一高元年』の中で、次のように述べています。

「ここに新しく週二時間の独乙語が登場する。唯一旧中学にはなかった科目で、石崎正雄教諭が担当した。テキストは星野慎一著・初級ドイツ語文典・第三書房発行で、文字はヒゲ文字であった。誰もが最初に覚えた文は、「ICH LIEBE DICH」だった事は言ふ迄もない。又、定冠詞の変化を「der des dem den」とお経の文句の様に唱へ、繰返した。

期末テストは、辞書持込自由のサブけた試験であった。結果は全員高得点で、多くのドイツ語ファンを生んだ。謹厳さうに見えたアンコー【石崎】先生、実に大物だったのである。

制度は始まってそれに伴ふ教材は間に合はず、手探り状態が続いた。それらを補ったのが、各科手作りのプリントであり、テストであった。当に無から有への挑戦と言っても良かったのである。教科書で生徒に渡ったのは、高等国語、生物、解析、幾何位のものに過ぎなかった。

部活動では、文化部には、郷土研究、科学、映画、弁論、文芸、美術部が、運動部には、庭球、水泳、野球、排球、卓球、送球部が創られ、学校としての形態が整ってきました。中でも排球部は、県体育大会で優勝して、10月の福岡国体に出場しています。

生徒会活動

11月4日と5日には文化祭が、8日には運動会が開催されました。また、13日には新講堂で、一高・二高の校友会が主催する、前進座による「ベニスの商人」が上演され、市内4高校(一高・二高・土浦市立高(現土浦三高)・土浦第一高女(現つくば国際大高))の生徒が鑑賞しています。

1949年3月1日には、1943年2月15日発行の『進修』(第46号)以来、久しく休刊していた『進修』(復刊第1号)が発行され、小田文雄校長は、

「…前略…一國の興廢は青年に負うところ大であるとはよく云われる言葉である。而して誠に現今ほど眞の意味に於て青年に期待するところ大なるはない。よくこのことを肝に銘じて、高度の知性涵養に邁進されん事を切に要請して巻頭の言に代えるものである。」と巻頭言を結んでいます。

高1回・中49回・併設中2回卒業

1949(昭和24)3月5日、卒業式が挙行され、高1回111名(1943年度入学)、中49回48名(1944年度入学)、併設中2回336名(1946年度入学)が、それぞれ卒業しました。その結果、旧制土浦中学生と併設中学生との姿が真鍋台の学舎から消え、土浦一高生だけとなりました。

高1回卒業の進学希望者は、新たに発足した新制大学の入試に挑みました。この入試に臨む受験生は、新制高校3年卒業生、旧制高校1年修了者、旧制大学予

科1年修了者、旧制専門学校1年修了者等と、実に多種多様で複雑でした。「進学適性検査」(大学進学にふさわしい適性・能力・資質を調べる検査。1947年度から1954年度まで、文部省の管理下で全国一斉に行われた。その内容は、文・理・一般、各問題種別に20問、計60問とし、検査時間は150分であった。)を受けていることが、国公立大学受験には必要となり、受験生には大きな負担となりました(合否の判定は、進学適性検査・学力検査・身体検査及び調査書の成績を総合して行うものとされた)。更に、この新制大学1回生は、4年後の1953年3月には、旧制大学最終回生と同時に卒業期を迎え、就職をする折にも厳しい競争を強いられることになりました。

中49回卒業生の進路は、就職(家業を継ぐことを含む)が殆どでしたが、後日、大学進学を希望する際には、新制高校卒の資格を取得しなければなりません(新制高校3年に編入してもらい卒業するか、大学入学資格検定試験に合格する必要がある)。

併設中2回卒業生は、土浦一高に進学した者、他の新制高校へ進んだ者(日比谷新宿・両国等の都立高校へ進学した者が多かった。中には大学で再び同窓生となる者もいた。)、就職した者、家業を継いだ者などに分かれました。転出した生徒が多かったためか、土浦一高では、新制中学校卒業生から1クラス分を新たに募集しました。4月7日に学力検査(国社数理)が行われ、119名が受験し、48名に入学が許可されました。

併設中から定時制への進学

併設中2回卒業から土浦一高に進んだ者の中には、諸般の事情から、定時制に進んだ者もいました。その1人である源田光也(併設中2回・定2回)は『進修百年』の中で、旧制中から併設中へ、

そして定時制へ、という本校での日々を次のように振り返っています。

「私達がこの学校【旧制土浦中学校】に入學したのは、この世に生を享けて以来、戦争に明け暮れた時代が、我が国の史上初めて経験する敗戦と云う形でやっと終わった約半年後の昭和二十一年の春でした。暗い混沌とした世情とは裏腹に、特に私は、大方の人より二年後れて、ようやく憧れの土浦中学に入學出来た喜びに胸を弾ませて、桜花爛漫たる校門を潜りました。当時は生徒の服装も区々【まちまち】で、多くの者は、海軍の戦闘帽に白線を二本巻いて学帽とし、道で先生に会った時は、海軍式の敬礼をするように指示されていました。校庭の隅には未だ防空壕が残っており、上級生の中には軍隊帰りの人も大勢おりました。

掲示された私の組は一年五組、担任は羽方稔先生とありました。：中略：

やがて私達は、新学制により併設中学の二年生となったが下級生は入學せず、【併設中3年生となつても下級生は入學せず】最下級生のまゝ、三年間の学校生活を終了しました。殆どの者は、そのまま現在の一高【全日制】に進學しましたが、一部の人はそこで学業を終えて就職し、又ある者は他の高校へ進學しました。私は父を亡くし、経済的な事情から、数名の同級生と一緒に、三年間一緒に学んだ皆んなに別れを告げて、前年度に設立された本校の定時制に進みました。その頃には実施されていた夏時間制のため、未だ陽の高い真鍋の坂を、その途中にある羽方先生の家の前を通って、汗だくになりながら、勤務先から学校へ直行しました。初めの頃は、途中で行き交う、ついこの間までのクラスメートと顔を合わせるのが、辛く、や、もすれば暗い気持ちにもなりがちでした。しかし、それぞれ職業も年齢も区々の人達が、学ぶ、と云う同じ

目的のために、夜、一堂に会する、そんな直向きな姿に、自分の甘い気持ちもいつしか消え失せていきました。

そして、創立以来男子校であった本校に、定時制だけ少数ながら女生徒を迎えて、新たな青春の息吹を感じ、それにもまして何より心強かったのは、引き続き、羽方先生、土井【鱗助】先生が授業を担当して下さったことでした。：後略：」

新制中学校からの入学生

1950（昭和25）年4月6日、新制中学校からの入学生を迎え、全日制にも、初めて女生徒6名が入學しました。2年生（高4回）にとつては、待ちに待った後輩でした。その喜びは純粹なものでしたが、「苦役」から解放されるぞ、という喜びもあったのです。彼らは、講堂等の教室以外の清掃区域やプール掃除等（最下級生が担当させられた。）の苦役を4年間強いられました。が、彼らのその喜びも束の間、何しろ、新入生は民主主義教育の申し子で、清掃分担やプール掃除も平等原則で、主張し、全学年でやることになってしまいました。旧制中学の伝統に則って後輩に気合いを入れてやる、と鉄拳制裁を加えた猛者もいましたが、先生に訴えられたため（旧制土浦中学生はそのようなことはしなかった。その代わり、制裁を加えた先輩を武道場裏の便所等と呼び出して、やり返していた。）先生から叱責を受け、暴力行為で停学処分になった者もいました（2・3年生は、今まで何の遠慮もなく、生徒に愛の鞭を加えてきた先生方の豹変振りに、面白くないものを感じていた。）。

高4回・本校第24代校長大曾根宏亮は、「高5回生を迎えるまでは、殆どの生徒が旧制中学の入学生であり、土浦一高になつたとは言え、旧制土浦中学の校風が色濃く残っていました。しかし、高5回生

を迎えて、新制中学から民主主義教育を受けてきた生徒との違いを痛感し、土浦中学が完全に消えたと実感しました。」と述懐しています。

定時制での日々

学校教育法の一部が改正され、1950年度には、夜間課程と定時制課程とを1つにして定時制課程とし、修業年限が4年以上となりました。土浦一高に併置された夜間制高校も、4月1日、茨城県立土浦第一高等学校定時制として再発足しました。この年に入學した成嶋正芳（定3回）は、高校生活を振り返って次のように記しています。

「戦後混乱の中、教育改革によって創設された『土浦一高』定時制に、私達は昭和25年4月に入學しました。入學した仲間、新制中学卒、併設中学卒として国民学校卒と年令も様々でした。特に、国民学校卒は、昭和19年に施行された学徒勤労動員令により、高等科生は工場に動員され、勉強どころではなく、卒業した時の頭は小学卒でした。その人達が、新制中学卒と一緒に机を並べて勉強するわけで、教える先生も大変でした。特に英語と数学とは、付いていくだけで精一杯。それでも、勤労学生に勉強の機会を与えられて入學した以上は、高卒の資格を指して頑張りました。私達の教室は、昼間部との併用で、薄暗い電灯の下、時には停電もあり、冬は達磨ストーブ一つを囲んで暖を取るなど、まだ施設が整備されていない環境の中、先生は熱心に講義され、私達も、昼間の疲れも忘れて熱心に教科書を捲っていました。

私達が4年生の時に生徒会が出来、部活にも参加し、秋には文化祭が開かれ、仲間が英語劇『ベニス商人』を上演し喝采を浴びました。また、『星座』を発売したりして、それなりに楽しく過ごしま

『ベニス商人』のキャストとその舞台スタッフ（左）とそのキャスト（右）



した。2回生の骨折【1952年、定2回源田光也らが学校側と交渉し、生徒たちの手で定時制初の修学旅行が行われた。】で実現した修学旅行では、第1日の伊勢で、【近鉄宇治山田駅の】集合時刻に遅れた一部の人達が、乗車駅を間違え【近鉄伊勢市駅から乗車した。】、幸い同じ電車に乗り合わせ、車中引率の土井【鱗助】先生に奈良までお説教を受けた事や給食のコッペパンや脱脂粉乳をおいしいと空腹を満たした事など、今では語り草となっています。このような環境の中で、熱心に勉強した仲間の内、国立大に5名が、私立大にも5名が進学し、その中の8名は卒業後教師の道を選び、次の世代の教育に当たられました。また、卒業後、様々な職場・地域で活躍した仲間から2名が、叙勲の栄に浴びています。これも、昼間部に負けまい、と頑張った結果で、『花の3回生』と自負しています。この事は、4年間真鍋の坂を上り、また村落からペタルを踏んで、『春夏秋冬』厳しい季節の変化の中を通学した体験が、アイデンティティとなつて、卒業後の歩みの中で生かされたものと思います。：後略：」（2013年度進修同窓会資料「卒業60周年謝辞」2013年4月14日、（高21回 松井泰寿